

金ロイオアン聖体礼儀（輔祭なし）

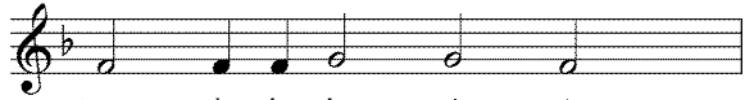
【 重聯禱 】

司祭) <sup>われらみなたましい まつと</sup>我等皆 靈 <sup>い</sup>を全 <sup>われら おもい まつと</sup>うして曰わん、我等の思 <sup>い</sup>を全 <sup>い</sup>うして曰わん、



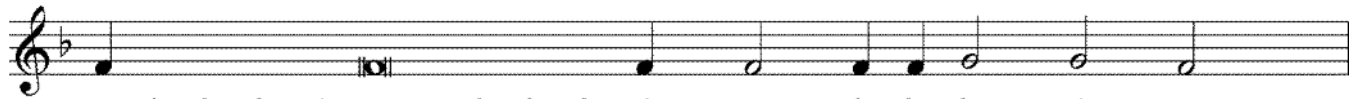
しゅあわれ めよ。  
主 憐

司祭) <sup>しゅぜんのうしや わ れつそ かみ なんぢ いの き い あわれ</sup>主全能者、吾が列祖の神よ、爾 <sup>い</sup>に禱 <sup>い</sup>る聆 <sup>い</sup>き納 <sup>い</sup>れて憐 <sup>い</sup>めよ、



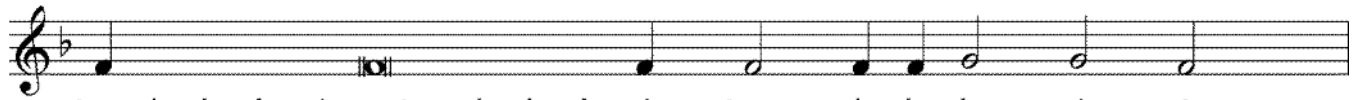
しゅ あわれ めよ。  
主 憐

司祭) <sup>かみ なんぢ おおい あわれみ よ われら あわれ なんぢ いの き い あわれ</sup>神よ、爾 <sup>い</sup>の大 <sup>い</sup>なる 憐 <sup>い</sup>に因 <sup>い</sup>りて我等 <sup>い</sup>を 憐 <sup>い</sup>めよ、爾 <sup>い</sup>に禱 <sup>い</sup>る、聆 <sup>い</sup>き納 <sup>い</sup>れて 憐 <sup>い</sup>めよ、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅ あわれ めよ。  
主 憐 主 憐 主 憐

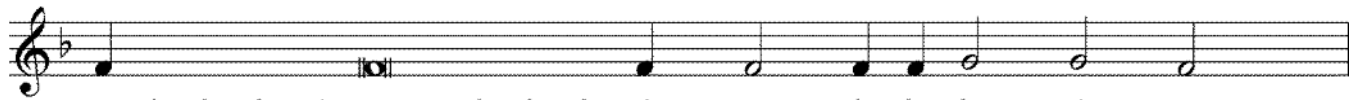
司祭) <sup>またわ く に てんのうおよ く に つかさど もの ため いの</sup>又我が國の天皇及 <sup>い</sup>び國 <sup>い</sup>を 司 <sup>い</sup>る者 <sup>い</sup>の爲 <sup>い</sup>に禱 <sup>い</sup>る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅ あわれ めよ。  
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) <sup>またきょうかい つかさど そんき われら ぜんにつぼん ふしゅきょう そんき われら せん</sup>又 教會 <sup>い</sup>を 司 <sup>い</sup>る尊 <sup>い</sup>貴 <sup>い</sup>なる我等 <sup>い</sup>の全 <sup>い</sup>日本 <sup>い</sup>の府 <sup>い</sup>主 <sup>い</sup>教 <sup>い</sup>ダニ <sup>い</sup>ル、尊 <sup>い</sup>貴 <sup>い</sup>なる我等 <sup>い</sup>の仙

<sup>だい だいしゅきょう およ お ことごと われら けいてい ため いの</sup>台 <sup>い</sup>の大 <sup>い</sup>主 <sup>い</sup>教 <sup>い</sup>セラ <sup>い</sup>フィ <sup>い</sup>ム、及 <sup>い</sup>びハ <sup>い</sup>リス <sup>い</sup>ト <sup>い</sup>スに <sup>い</sup>於 <sup>い</sup>ける <sup>い</sup>悉 <sup>い</sup>く <sup>い</sup>の我等 <sup>い</sup>の兄 <sup>い</sup>弟 <sup>い</sup>の爲 <sup>い</sup>に禱 <sup>い</sup>る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅ あわれ めよ。  
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) <sup>またわれら けいてい しよしさい しよしゅうどうしさい およ お われら しゅうけいてい</sup>又我等 <sup>い</sup>の兄 <sup>い</sup>弟 <sup>い</sup>、諸 <sup>い</sup>司 <sup>い</sup>祭 <sup>い</sup>、諸 <sup>い</sup>修 <sup>い</sup>道 <sup>い</sup>司 <sup>い</sup>祭 <sup>い</sup>、及 <sup>い</sup>びハ <sup>い</sup>リス <sup>い</sup>ト <sup>い</sup>スに <sup>い</sup>於 <sup>い</sup>ける我等 <sup>い</sup>の衆 <sup>い</sup>兄 <sup>い</sup>弟

<sup>ため いの</sup>の爲 <sup>い</sup>に禱 <sup>い</sup>る、

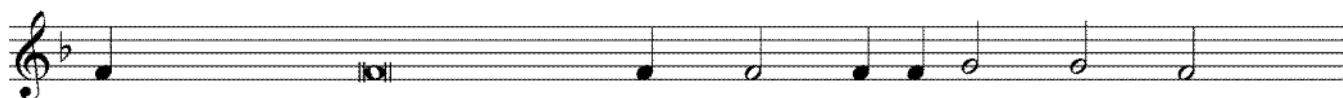


しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅ あわれ めよ。  
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) <sup>またつね きおく ふく しせい せいきょう パトリアルフ せいどう こんりゅうしや およ</sup>又恒 <sup>い</sup>に記 <sup>い</sup>憶 <sup>い</sup>せら <sup>い</sup>るる、福 <sup>い</sup>たる至 <sup>い</sup>聖 <sup>い</sup>なる正 <sup>い</sup>教 <sup>い</sup>の總 <sup>い</sup>主 <sup>い</sup>教 <sup>い</sup>、この聖 <sup>い</sup>堂 <sup>い</sup>の建 <sup>い</sup>立 <sup>い</sup>者 <sup>い</sup>、及

<sup>すで ねむ ことごと ふそけいてい こ ところ しよほう ほうむ せいきょう もの ため</sup>び已 <sup>い</sup>に寢 <sup>い</sup>りし 悉 <sup>い</sup>く <sup>い</sup>の父 <sup>い</sup>祖 <sup>い</sup>兄 <sup>い</sup>弟 <sup>い</sup>、此 <sup>い</sup>の處 <sup>い</sup>と諸 <sup>い</sup>方 <sup>い</sup>とに 葬 <sup>い</sup>られ <sup>い</sup>たる正 <sup>い</sup>教 <sup>い</sup>の者 <sup>い</sup>の爲 <sup>い</sup>

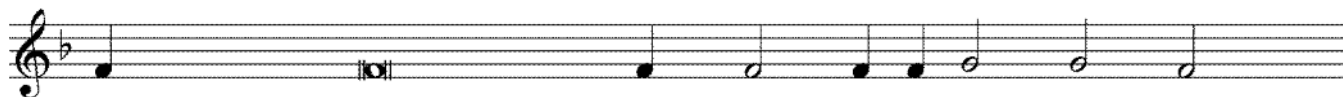
いの  
に禱る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) またこの至尊なる聖堂に物を献り、善業を行い、之に勞し、之に歌い、及び

ここに立ちて爾の大にして豊なる憐を仰ぎ望む者の爲に禱る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
主 憐 主 憐 主 憐

( ※ 特別な災害や特別な感謝がある時、重聯禱にその旨追加する場合がある。その場合も「主憐め、主憐め、主憐めよ。」と応えて歌う。 )

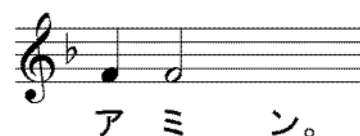
司祭) ( 黙誦：主我が神よ、爾の諸僕より此の熱切の祈禱を受け、爾が憐の多きに

よ因りて我等を憐み、爾の恵を我等と凡そ爾の豊なる憐を仰ぐ

爾の民に遣し給え、 )

司祭) 蓋爾は慈憐にして人を愛する神なり、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今

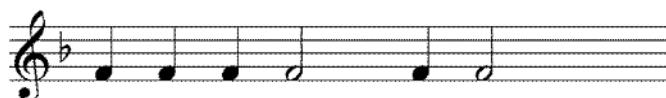
も何時も世に、



ア ミ ン。

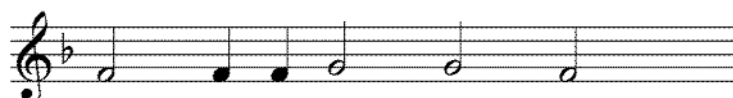
### 【 啓蒙者の聯禱 】

司祭) 啓蒙者よ、主に禱るべし、



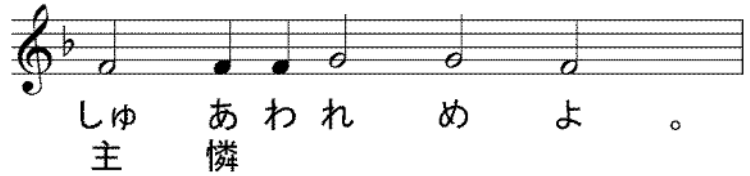
しゅあわれめよ。  
主 憐

司祭) 信者よ、啓蒙者の爲に禱らん、願くは主は彼等に憐を垂れん、

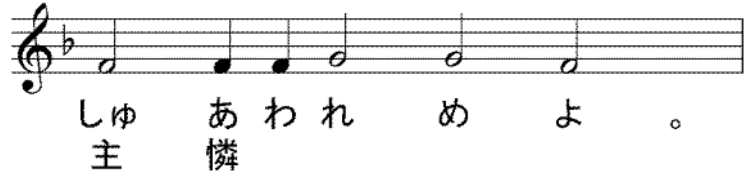


しゅあわれめよ。  
主 憐

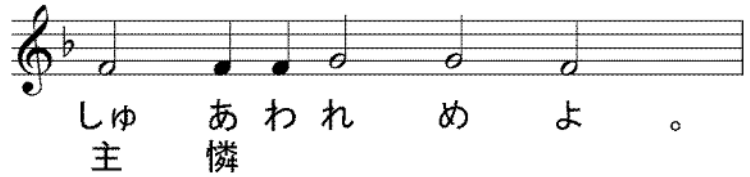
司祭) <sup>しんじつ ことば もつ かれら けいもう</sup> 眞實の言を以て彼等を啓蒙せん、



司祭) <sup>ぎ ふくいんけい かれら ひら</sup> 義の福音經を彼等に啓かん、



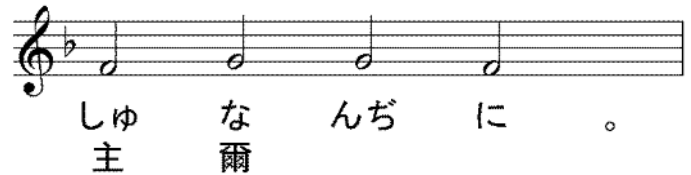
司祭) <sup>かれら そのせい こう した きょうかい いつ</sup> 彼等を其聖・公・使徒の教會に一にせん、



司祭) <sup>かみ なんぢ おんちよう もつ かれら すく あわれ たす まも</sup> 神よ、爾の恩寵を以て、彼等を救い憐み佑け護れよ、



司祭) <sup>けいもうしゃ なんぢら こうべ しゅ かが</sup> 啓蒙者よ、爾等の首を主に屈めよ、



司祭) ( 黙誦：主我が神、<sup>しゅわ かみ たか お ひく のぞ なんぢ どくせいし かみ わ しゅ</sup> 高きに居り卑きを臨み、爾の獨生子・神・我が主イイススハ

<sup>つかわ にんげん すくい もの なんぢ ぼく けいもうしゃ そのこうべ</sup> リストスを遣して人間の救となしし者よ、爾の僕・啓蒙者・其首を

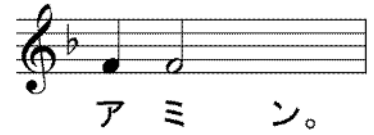
<sup>なんぢ かが もの かえり とき したが かれら ふくせい よくぼん しょざい ゆるし</sup> 爾に屈めし者を顧み、時に随いて、彼等に復生の浴盤、諸罪の赦、

<sup>ふきゆう ころも たま かれら なんぢ せい こう した きょうかい いつ かれら なんぢ</sup> 不朽の衣を賜い、彼等を爾が聖・公・使徒の教會に一にし、彼等を爾

<sup>えら むれ あわ たま</sup> の選ばれたる群に合せ給え、 )

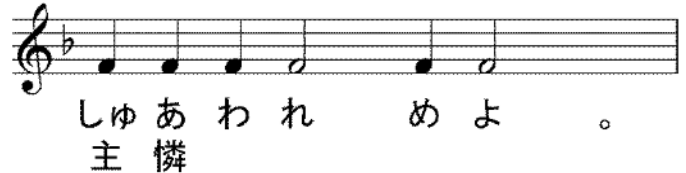
司祭) <sup>ねがわ かれら われら とも なんぢちち こ せいしん しそんしえい な さんよう いま い</sup> 願くは彼等も我等と偕に、爾父と子と聖神の至尊至榮の名を讃揚せん、今も何

<sup>つ よよ</sup> 時も世世に、



【 信者の聯禱 1 】

司祭) 衆 啓 蒙 者 出 で よ、 啓 蒙 者 出 で よ、 衆 啓 蒙 者 出 で よ、 啓 蒙 者 一 人 も な く、 唯 信  
者 復 又 安 和 に し て 主 に 禱 ら ん、



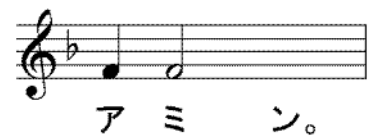
司祭) 神 よ、 爾 の 恩 寵 を 以 て、 我 等 を 佑 け 救 い 憐 み 護 れ よ、



司祭) 睿 智、

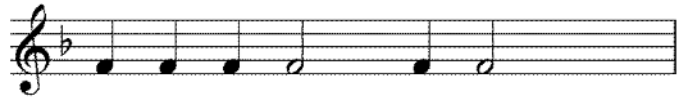
司祭) ( 黙 誦： 主、 萬 軍 の 神 や、 爾 が 我 等 に、 今 も 爾 の 聖 な る 祭 壇 の 前 に 立 ち、 爾  
の 慈 憐 に 俯 伏 し、 我 等 の 罪 と 衆 人 の 過 と の 爲 に 祈 禱 す る を 赦 し 給 い し  
を 爾 に 感 謝 す、 神 よ、 我 等 の 禱 を 納 れ、 我 等 を 爾 が 衆 人 の 爲 に、 爾  
に 祈 と 願 と 無 血 の 祭 と を 獻 ず る に 勝 う る 者 と な し 給 え、 我 等 爾 が 聖  
神 の 力 に て 此 の 爾 の 奉 事 の 爲 に 立 て し 者 を、 定 罪 な く、 躓 な く、 其 良  
心 の 潔 き 證 を 以 て、 何 の 時 何 の 處 に も 爾 を 籲 ぶ に 適 う 者 と な し  
て、 爾 我 等 に 聴 き、 爾 が 哀 憐 の 多 き に 依 り て、 我 等 の 爲 に 仁 慈 の 者 と な  
る を 致 せ、 )

司祭) 蓋 凡 そ 光 榮 尊 貴 伏 拜 は 爾 父 と 子 と 聖 神 に 歸 す、 今 も 何 時 も 世 世 に、



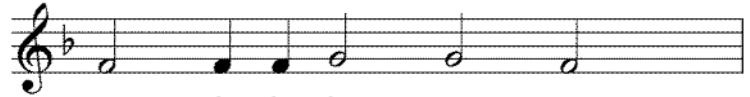
【 信者の聯禱 2 】

司祭) われらまたまたあんわ しゅ いの  
我等復又安和にして主に禱らん、



しゅあわれ めよ。  
主 憐

司祭) かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも  
神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



しゅ あわれ めよ。  
主 憐

司祭) えいち  
睿智、

司祭) ( 黙誦: ぜん ひと あい しゅ われらまたかつしばしばんぢ ふふく なんぢ いの われ  
等の禱を顧みて、我等の靈と體とを凡そ肉體と靈神との穢より

ら いのり かえり われら たましい からだ およ にくたい れいしん けがれ  
潔くし、我等に、玷なく、定罪なく、爾の聖なる祭壇の前に立つを賜え、

いさぎよ われら きず ていざい なんぢ せい さいだん まえ た たま  
神や、我等と偕に祈禱する者にも、生命と信と屬神の智識との進歩を與え

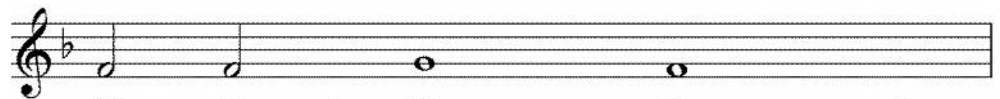
かみ われら とも きとう もの いのち しん ぞくしん ちしき しんぽ あた  
給え、彼等が常に畏と愛とを以て爾に務めて、玷なく、定罪なく、爾

たま かれら つね おそれ あい もつ なんぢ つと きず ていざい なんぢ  
の聖機密を領け、爾の天國に入るに勝る者となるを得せしめ給え、 )

せいきみつ う なんぢ てんごく い た もの え たま  
の聖機密を領け、爾の天國に入るに勝る者となるを得せしめ給え、 )

司祭) われらつね なんぢ けんぺい もと まも こうえい なんぢちち こ せいしん けん ため  
我等常に爾が權柄の下に護られて、光榮を爾父と子と聖神に獻ずるが爲なり、

いま いつ よよ  
今も何時も世に、

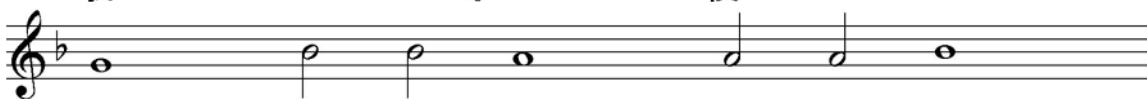


ア ミ ン。ア ミ ン。

【 ヘルヴィムの歌 】



われら っ っ し い  
我 等 慎



んで ヘルヴィ ムに の っ と  
法

り、へルヴィムに、  
 の法、おとつと、り、  
 せ聖、いさ三、んのうたあ、  
 をい生のちをほど、  
 こすのせ聖いさ三、  
 んしゃにたてまつり、  
 て、  
 このおよのつとめ、  
 をしりぞくべし、  
 しりぞおくべえし。

司祭) ( 黙誦：肉體の慾と快樂とに縛られし者は、一も爾光榮の王に來り、或は

ちか 近づき、あるい ほうじ 奉事するに堪うるなし、蓋 爾に奉事するは、てんぐん 天軍の爲にも大

にして畏るべきなり、しか 然れども 爾は言い難く量り難き 爾の仁愛に因りて、ほん

せい 性を易えず 失 わずして人となり、われら 我等の爲に 司祭 首となり、またばんゆう 又萬有の主宰

なるに縁<sup>よ</sup>りて、我<sup>われら</sup>等<sup>こ</sup>に此<sup>ほうじ</sup>の奉<sup>むけつさい</sup>事の無<sup>せいじ</sup>血<sup>つた</sup>祭<sup>たま</sup>の聖<sup>けだししゅわ</sup>事を傳<sup>かみ</sup>え給<sup>かみ</sup>えり、蓋<sup>かみ</sup> 主<sup>かみ</sup>我<sup>かみ</sup>が神<sup>かみ</sup>や、  
 爾<sup>なんぢ</sup>は獨<sup>ひとり</sup>天<sup>ひとり</sup>地<sup>てんち</sup>の事<sup>こと</sup>を宰<sup>さい</sup>理<sup>り</sup>す、爾<sup>なんぢ</sup>はヘルヴィムの寶<sup>ほうざ</sup>座<sup>にな</sup>に荷<sup>もの</sup>わ<sup>もの</sup>る者<sup>もの</sup>、セラフィ  
 ムの主<sup>しゅ</sup>、イズライリの王<sup>おう</sup>、獨<sup>ひとり</sup>聖<sup>せい</sup>にして聖<sup>せい</sup>者<sup>しや</sup>の中<sup>うち</sup>に息<sup>い</sup>う者<sup>こ</sup>なり、故<sup>ゆえ</sup>に我<sup>われ</sup> 爾<sup>なんぢ</sup>  
 獨<sup>ひとり</sup>善<sup>ぜん</sup>にして善<sup>よ</sup>く納<sup>もの</sup>る者<sup>いの</sup>に禱<sup>われつみ</sup>る、我<sup>た</sup>罪<sup>なんぢ</sup>ありて堪<sup>ぼく</sup>えざる爾<sup>かえり</sup>の僕<sup>わ</sup>を顧<sup>わ</sup>み、我<sup>わ</sup>が  
 靈<sup>たましい</sup>と心<sup>こころ</sup>とを邪<sup>よこしま</sup>なる思<sup>しりよ</sup>慮<sup>きよ</sup>より淨<sup>われしんぴん</sup>め、我<sup>おんちよう</sup>神<sup>こうむ</sup>品<sup>もの</sup>の恩<sup>もの</sup>寵<sup>もの</sup>を被<sup>もの</sup>れる者<sup>もの</sup>を、  
 爾<sup>なんぢ</sup>が聖<sup>せい</sup>神<sup>しん</sup>の力<sup>ちから</sup>に藉<sup>よ</sup>りて、此<sup>こ</sup>の爾<sup>なんぢ</sup>の聖<sup>せい</sup>なる食<sup>しょくあん</sup>案<sup>まえ</sup>の前<sup>た</sup>に立<sup>なんぢ</sup>ち、爾<sup>なんぢ</sup>が至<sup>しじよう</sup>淨<sup>しじよう</sup>  
 なる聖<sup>せい</sup>體<sup>たい</sup>至<sup>せい</sup>尊<sup>そん</sup>なる聖<sup>せい</sup>血<sup>けつ</sup>の機<sup>き</sup>密<sup>みつ</sup>を行<sup>おこな</sup>うに堪<sup>た</sup>うる者<sup>もの</sup>となし給<sup>たま</sup>え、蓋<sup>けだし</sup>我<sup>われ</sup>首<sup>くわい</sup>を  
 屈<sup>かが</sup>めて爾<sup>なんぢ</sup>に就<sup>つ</sup>き、爾<sup>なんぢ</sup>に禱<sup>いの</sup>る、爾<sup>なんぢ</sup>の顔<sup>かん</sup>を我<sup>われ</sup>より避<sup>さ</sup>くる勿<sup>なか</sup>れ、我<sup>われ</sup>を爾<sup>なんぢ</sup>が僕<sup>ぼく</sup>  
 衆<sup>しゅう</sup>の中<sup>うち</sup>より却<sup>しりぞ</sup>くる勿<sup>なか</sup>れ、乃<sup>すなわ</sup>我<sup>われ</sup>罪<sup>つみ</sup>有<sup>あ</sup>りて當<sup>あた</sup>らざる爾<sup>なんぢ</sup>の僕<sup>ぼく</sup>に此<sup>こ</sup>の祭<sup>さい</sup>物<sup>もつ</sup>を  
 獻<sup>ささ</sup>ぐるを致<sup>いた</sup>させ給<sup>たま</sup>え、蓋<sup>けだし</sup>ハリス<sup>わ</sup>トス我<sup>かみ</sup>が神<sup>なんぢ</sup>よ、爾<sup>けん</sup>は獻<sup>もの</sup>ずる者<sup>けん</sup>と獻<sup>もの</sup>ぜらる者<sup>もの</sup>、  
 受<sup>う</sup>くる者<sup>もの</sup>と頒<sup>わか</sup>たる者<sup>もの</sup>なり、我<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>光<sup>こう</sup>榮<sup>えい</sup>を爾<sup>なんぢ</sup>と爾<sup>なんぢ</sup>の無<sup>むげん</sup>原<sup>ちち</sup>の父<sup>しせい</sup>と至<sup>せい</sup>聖<sup>しぜん</sup>至<sup>ぜん</sup>善<sup>ぜん</sup>に  
 して生<sup>いのち</sup>命<sup>ほど</sup>を施<sup>なんぢ</sup>す爾<sup>しん</sup>の神<sup>けん</sup>とに獻<sup>いま</sup>ず、今<sup>いつ</sup>も何<sup>よ</sup>時<sup>よ</sup>も世<sup>よ</sup>世<sup>よ</sup>に、 )

司祭) ( 黙誦: 我<sup>われら</sup>等<sup>ら</sup>奥<sup>おう</sup>密<sup>みつ</sup>にしてヘルヴィムを像<sup>かたど</sup>り、聖<sup>せい</sup>三<sup>さん</sup>の歌<sup>うた</sup>を生<sup>いのち</sup>命<sup>ほど</sup>を施<sup>さん</sup>す三者<sup>しや</sup>に歌<sup>うた</sup>い、 )

今<sup>いま</sup>此<sup>こ</sup>の世<sup>よ</sup>の慮<sup>おも</sup>を悉<sup>ことごと</sup>く退<sup>しりぞ</sup>く可<sup>べ</sup>し、天<sup>てん</sup>使<sup>し</sup>の軍<sup>ぐん</sup>の見<sup>み</sup>えずして荷<sup>にな</sup>い奉<sup>たてまつ</sup>る萬<sup>ばん</sup>  
 有<sup>ゆう</sup>の王<sup>おう</sup>を戴<sup>いた</sup>かんとするに縁<sup>よ</sup>る、ア<sup>われら</sup>リ<sup>ら</sup>ル<sup>ら</sup>イ<sup>ら</sup>ヤ、ア<sup>われら</sup>リ<sup>ら</sup>ル<sup>ら</sup>イ<sup>ら</sup>ヤ、ア<sup>われら</sup>リ<sup>ら</sup>ル<sup>ら</sup>イ<sup>ら</sup>ヤ。我<sup>われら</sup>等<sup>ら</sup>奥<sup>おう</sup>密<sup>みつ</sup>  
 にしてヘルヴィムを像<sup>かたど</sup>り、聖<sup>せい</sup>三<sup>さん</sup>の歌<sup>うた</sup>を生<sup>いのち</sup>命<sup>ほど</sup>を施<sup>さん</sup>す三者<sup>しや</sup>に歌<sup>うた</sup>い、今<sup>いま</sup>此<sup>こ</sup>の世<sup>よ</sup>  
 の慮<sup>おも</sup>を悉<sup>ことごと</sup>く退<sup>しりぞ</sup>く可<sup>べ</sup>し、天<sup>てん</sup>使<sup>し</sup>の軍<sup>ぐん</sup>の見<sup>み</sup>えずして荷<sup>にな</sup>い奉<sup>たてまつ</sup>る萬<sup>ばん</sup>有<sup>ゆう</sup>の王<sup>おう</sup>を  
 戴<sup>いた</sup>かんとするに縁<sup>よ</sup>る、ア<sup>われら</sup>リ<sup>ら</sup>ル<sup>ら</sup>イ<sup>ら</sup>ヤ、ア<sup>われら</sup>リ<sup>ら</sup>ル<sup>ら</sup>イ<sup>ら</sup>ヤ、ア<sup>われら</sup>リ<sup>ら</sup>ル<sup>ら</sup>イ<sup>ら</sup>ヤ。我<sup>われら</sup>等<sup>ら</sup>奥<sup>おう</sup>密<sup>みつ</sup>にしてヘル  
 ヴィムを像<sup>かたど</sup>り、聖<sup>せい</sup>三<sup>さん</sup>の歌<sup>うた</sup>を生<sup>いのち</sup>命<sup>ほど</sup>を施<sup>さん</sup>す三者<sup>しや</sup>に歌<sup>うた</sup>い、今<sup>いま</sup>此<sup>こ</sup>の世<sup>よ</sup>の慮<sup>おも</sup>を  
 悉<sup>ことごと</sup>く退<sup>しりぞ</sup>く可<sup>べ</sup>し、天<sup>てん</sup>使<sup>し</sup>の軍<sup>ぐん</sup>の見<sup>み</sup>えずして荷<sup>にな</sup>い奉<sup>たてまつ</sup>る萬<sup>ばん</sup>有<sup>ゆう</sup>の王<sup>おう</sup>を戴<sup>いた</sup>かんと  
 するに縁<sup>よ</sup>る、ア<sup>われら</sup>リ<sup>ら</sup>ル<sup>ら</sup>イ<sup>ら</sup>ヤ、ア<sup>われら</sup>リ<sup>ら</sup>ル<sup>ら</sup>イ<sup>ら</sup>ヤ、ア<sup>われら</sup>リ<sup>ら</sup>ル<sup>ら</sup>イ<sup>ら</sup>ヤ。

神<sup>かみ</sup>よ、我<sup>われ</sup>罪<sup>ざい</sup>人<sup>にん</sup>を淨<sup>きよ</sup>め給<sup>たま</sup>え、神<sup>かみ</sup>よ、我<sup>われ</sup>罪<sup>ざい</sup>人<sup>にん</sup>を淨<sup>きよ</sup>め給<sup>たま</sup>え、神<sup>かみ</sup>よ、我<sup>われ</sup>罪<sup>ざい</sup>人<sup>にん</sup>を  
 淨<sup>きよ</sup>め給<sup>たま</sup>え、 )

【 大聖入 】

司祭) <sup>ねがわ しゅ かみ そのくに おい わ くに てんのうおよ くに つかさど もの つね きおく</sup> 願くは主・神は其國に於て、我が國の天皇及び國を司る者を恒に記憶せん、

<sup>いま いつ よよ</sup> 今も何時も世世に、

<sup>ねがわ しゅ かみ そのくに おい きょうかい つかさど そんなき われら ぜんにつぼん ふしゅきょう</sup> 願くは主・神は其國に於て、教會を司る尊貴なる我等の全日本の府主教  
<sup>そんき われら せんだい だいしゅきょう つね きおく いま いつ よよ</sup> ダニイル、尊貴なる我等の仙台の大主教セラフィムを恒に記憶せん、今も何時も世世  
に、

<sup>ねがわ しゅ かみ そのくに おい すで ねむ ふしゅきょう ふしゅきょう ふ</sup> 願くは主・神は其國に於て、已に寝りし府主教セルギイ、府主教イリネイ、府  
<sup>しゅきょう ふしゅきょう だいしゅきょう しゅきょう しゅきょう</sup> 主教ウラディミル、府主教フェオドシイ、大主教ニコライ、主教ニコライ、主教  
<sup>およ こと きおく われら すで ねむ かぞく けいていしまい もろもろ</sup> ペトル、(及び殊に記憶せらるる某)我等の已に寝りし家族、兄弟姉妹、諸の  
<sup>えんしゃ ほうゆうら つね きおく いま いつ よよ</sup> 縁者、朋友等を恒に記憶せん、今も何時も世世に、

<sup>ねがわ しゅ かみ そのくに おい なんぢしゅうせいきょう ら およ こと き</sup> 願くは主・神は其國に於て、爾衆正教のハリストティアノン等(及び殊に記  
<sup>おく</sup> 憶せらるる某)を恒に記憶せん、今も何時も世世に、



か 神 の な み い 居 る つ か い  
は み 見 え ず し て に な い た て ま  
つ る 、 ば ん ぶ つ の つ か  
さ を お い い た だ け ば な  
り 。



ア リ ル イ ヤ 、 ア リ  
 ル イ ヤ 、 ア リ ル イ  
 ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 。

司祭) ( 黙誦：尊とうときイオシフは爾なんぢの潔いさぎよき身みを木きより下おろし、淨きよき布ぬのに裹つつみ、香こうりょう料りょうにて

覆おおい、新あらたなる墓はかに藏おさめり、

ハリストスよ、爾なんぢは神かみなるにより、體からだにて墓はかに在あり、靈たましいにて地獄ちごくに在あり、

右盜うとうと偕ともに天てん堂どうに在あり、父ちちと聖せい神しんと共ともに寶ほう座ざに在あり、限かぎりなき者ものとして一いつ

切さいを満みて給たまえり、

ハリストスよ、我わが復ふく活かつの泉いづみたる爾なんぢの墓はかは、生いのち命ほどこを施ものす者ちどう、地堂ちどうより

美うるわしき者もの、実じつに如何いかなる王おうの宮みやよりも耀かがやける者ものと顯あらわれたり、

尊とうときイオシフは爾なんぢの潔いさぎよき身みを木きより下おろし、淨きよき布ぬのに裹つつみ、香こうりょう料りょうにて

覆おおい、新あらたなる墓はかに藏おさめり、

主しゅよ、爾なんぢの恵めぐみに因よりて恩おんをシオンたに垂たれ、イエルサリムじょうえんの城た垣たまを建たて給

え、其その時ときに爾なんぢ義ぎの祭まつり、獻ささげ物ものと燔やき祭まつりを喜よろこび饗うげん、其その時ときに人ひと人びと爾なんぢ

の祭壇さいだんに犢こうしを奠そなえんとす、 )

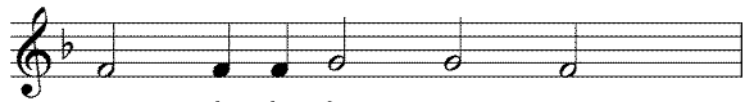
【 増聯禱 】

司祭) 我われ等ら主しゅの前まえに吾わが禱いのりを増まし加くわえん、

しゅあわれ めよ 。

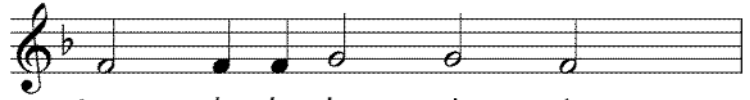
主 憐

司祭) 獻ささげたる尊とうとき祭品さいひんの爲ために主しゅに禱いのらん、



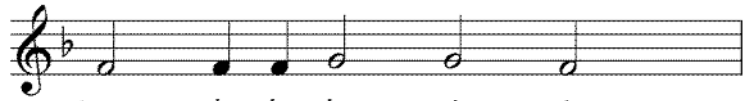
しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) <sup>こ せいどう およ しん つつしみ かみ おそ こころ もつ ここ きた もの ため しゅ いの</sup>  
此の聖堂、及び信と 慎 と神を畏るる 心 とを以て此に来る者の爲に主に禱ら  
ん、



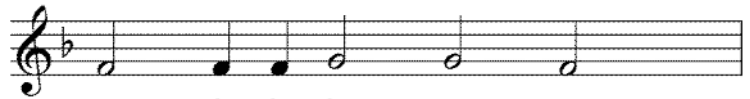
しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) <sup>われら もろもろ うれい いかり あやうき まぬか ため しゅ いの</sup>  
我等 諸 の憂愁と忿怒と危難とを 免 るるが爲に主に禱らん、



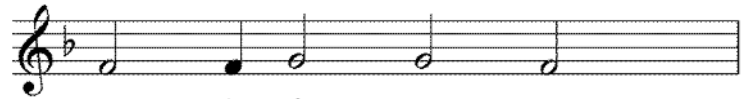
しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) <sup>かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも</sup>  
神よ、爾の恩 寵 を以て、我等を 佑け救い 憐 み護れよ、



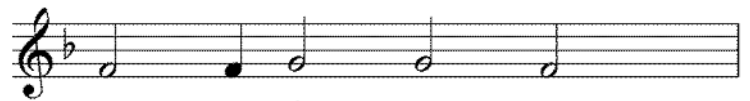
しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) <sup>こ ひ じゅんぜん せいせい へいあん むざい しゅ もと</sup>  
此の日の 純 全・成 聖・平 安・無 罪ならんことを主に 求む、



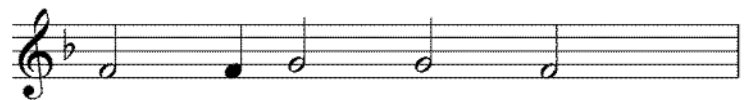
しゅ たま え よ 。  
主 賜

司祭) <sup>へいあん てんし ただ きょうどうし わ れいたい しゅごしや たま しゅ もと</sup>  
平 安の天使、正しき 教 導師、吾が 靈 體の 守 護者を 賜わんことを主に 求む、



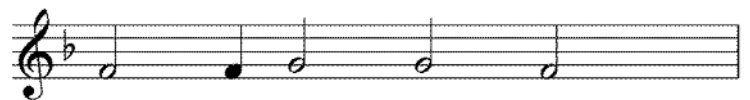
しゅ たま え よ 。  
主 賜

司祭) <sup>われら つみ あやまち なた ゆる しゅ もと</sup>  
我等の 罪 と 過 とを宥め 赦さんことを主に 求む、



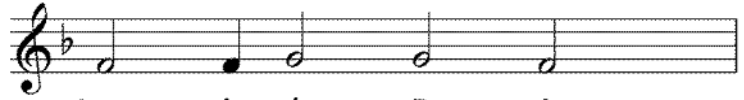
しゅ たま え よ 。  
主 賜

司祭) <sup>われら たましい ぜん えき こと およ せかい へいあん たま しゅ もと</sup>  
我等の 靈 に善にして 益ある事、及び世界に 平 安を 賜わんことを主に 求む、



しゅ たま え よ 。  
主 賜

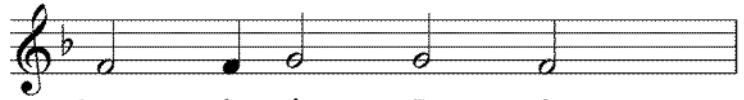
司祭) <sup>われら いのち よじつ へいあん つうかい もつ おわ</sup>我等の生命の餘日を平安と痛悔とを以て終らんことを主しゅに求む、



しゅ たま え よ 。  
主 賜

司祭) <sup>われら いのち おわり</sup>我等の生命の終かな やまい はぢ へいあん およがハリストティアニンに適い、疾なく、耻なく、平安なること、及び

<sup>おそ しんばん おい よろ こたえ たま もと</sup>ハリストスの畏るべき審判に於て宜しき對ををなすを賜わんことを求む、

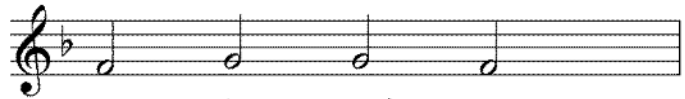


しゅ たま え よ 。  
主 賜

司祭) <sup>しせいしけつ</sup>至聖至潔にして至りて讚美いた さんびたる我等の光榮われら こうえい ぢよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよの女宰・生神女・永貞童女マリア

<sup>しよせいじん きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと</sup>と、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉く

<sup>われら いのち もつ かみ いたく</sup>の我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、



しゅ なんぢ に 。  
主 爾

司祭) ( 黙誦: <sup>しゅ かみ ぜんのうしや ひとりせい</sup>主・神・全能者、獨聖にして心こころ つくを盡して爾なんぢ よを籲ぶ者より讚美の祭

<sup>う もの われらざいにん いのり う なんぢ せい さいだん たづさ われら</sup>を受くる者よ、我等罪人の禱をも受けて爾の聖なる祭壇に携え、我等を、

<sup>わ つみ しゅうじん あやまち ため なんぢ ささげもの ぞくしん まつり けん</sup>我が罪と衆人の過との爲に、爾に獻物と屬神の祭とを獻ずるに

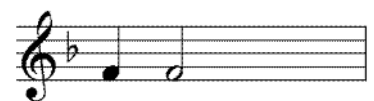
<sup>た もの たま われら なんぢ まえ おんちよう え われら まつり</sup>勝うる者となし給え、我等に爾の前に恩寵を得せしめて、我等の祭は

<sup>なんぢ よ い もの なんぢ おんちよう ぜんしん のぞ われら うち こ</sup>爾に善く納れらる者となり、爾が恩寵の善神は臨みて、我等の中と此の

<sup>そな さいひん なんぢ しゅうじん お いた たま</sup>供えられたる祭品と爾の衆人とに居るを致させ給え、 )

司祭) <sup>なんぢ どくせいし じれん よ なんぢ かれ しせいしぜん いのち ほどこ なんぢ しん</sup>爾の獨生子の慈憐に因りてなり、爾は彼と至聖至善にして生命を施す爾の神

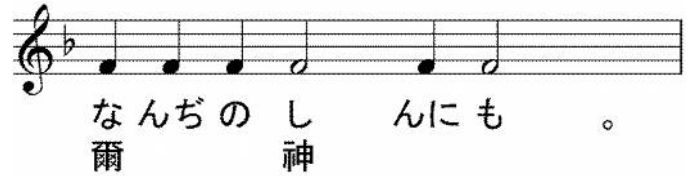
<sup>とも あが ほ いま いつ よよ</sup>と偕に崇め讃めらる、今も何時も世世に、



ア ミ ン。

【 ニケア・コンスタンチヌーポリ全地公会にて採択されし信經 】

司祭) <sup>しゅうじん へいあん</sup> 衆人に平安、



司祭) <sup>われらたがい あいあい どうしん う みと ため</sup> 我等互に相愛すべし、同心にして承け認めんが爲なり、



司祭) ( 黙誦: <sup>しゅわれ ちから われなんぢ あい しゅ われ かため われ かくれが しゅわれ</sup> 主我の力よ、我爾を愛せん、主は我の防固、私の避所なり、主我の  
<sup>ちから われなんぢ あい しゅ われ かため われ かくれが しゅわれ ちから われ</sup> 力よ、我爾を愛せん、主は我の防固、私の避所なり、主我の力よ、我  
<sup>なんぢ あい しゅ われ かため われ かくれが</sup> 爾を愛せん、主は我の防固、私の避所なり、 )

司祭) <sup>もんもん つつし き</sup> 門、門、敬みて聴くべし、



れしものにてつくられしにあらず、ちち  
者 造 非 父

といたいにしてばんぶつかれにつくられ、  
一 體 萬 物 彼 造

われらひとびとのため、またわれらのすくい  
我 等 人 人 の 爲 又 我 等 救

のためにてんよりくだり、せいしんおよび  
爲 天 降 聖 神 及

どうていぢよマリヤよりみをとりにととな  
童 貞 女 身 取 人

り、われらのためにポンティイピラトのときじゅう  
我 等 の 爲 に ポンティイピラト の 時 十

じかにくぎうたれ、くるしみをうけほう  
字 釘 苦 受 葬

むられ、だいさんじつにせいしょにかないて  
第 三 日 聖 書 應

ふくかつし、てんのぼり、ちちのみぎに  
復 活 天 升 父 右

ざし、こうえいをあらわしていけるもの  
坐 光 榮 顯 生 者

としせしものとしんぱんするのためにまたきた  
死 者 の と しんぱん する の ため に また きた

り、そのくにおわりなからんを、またしん  
其 國 終 ん を 、 また しん 信

ず、せいしんしゅいのちをほどこすものちちより  
 聖神主生命施者父

いで、ちちおよびことともにおがまれほ讃  
 出父及子共拜がまれほ讃

められ、よげんしゃをもつてかつていいしを、  
 預言者以嘗言

またしんず、ひとつのせいなるおおやけなるし使  
 又信一聖公おやけなるし使

とのかきょうかいを、われみとむ、ひとつの  
 徒教會我認一

せんれい、もつてつみのゆるしをうるを、  
 洗禮以罪赦得

われのごむししゃのふくかつ、ならびに  
 我望死者復活並

らいせいのいのちを、アミン。  
 來世生

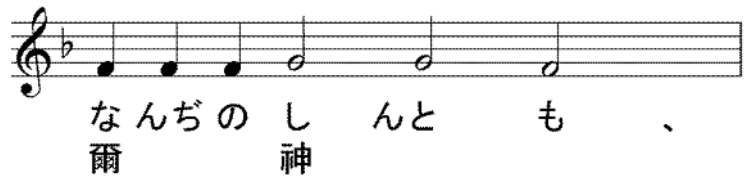
司祭) <sup>ただ</sup>正しく立ち、<sup>た</sup>畏れて立ち、<sup>おそ</sup>敬みて<sup>た</sup>安和にして<sup>つつし</sup>聖なる<sup>あんわ</sup>獻物を<sup>せい</sup>奉らん、<sup>ささげもの</sup> <sup>たてまつ</sup>

したしみのささげもの、ほめあげの  
 親獻物、讃揚

まつりを、  
 祭

司祭) <sup>ねがわ</sup>願くは我が<sup>わ</sup>主<sup>しゅ</sup>イイススハリストスの<sup>めぐみ</sup>恩、<sup>かみちち</sup>神父の<sup>いつくしみ</sup>慈、<sup>せいしん</sup>聖神の<sup>したしみ</sup>親は、<sup>なんぢしゅう</sup>爾衆

<sup>じん</sup>人と<sup>とも</sup>偕に<sup>あ</sup>在らんことを、



なんぢのしんとも、  
爾 神

司祭) <sup>こころうえ むか</sup> 心上に向うべし、



しゅにむかえり、  
主 向

司祭) <sup>しゅ かんしゃ</sup> 主に感謝すべし、



ちちとことせいしん、いったいにして  
父 子 聖 神 一體



わかれざるせいさんしゃは、とおとみおが  
分 聖 三者 は 尊 おとみおが  
拜



ま る べ し 。

司祭) ( 黙誦: <sup>なんぢ かしょう なんぢ さんよう なんぢ さんび なんぢ かんしゃ なんぢ いつさい</sup> 爾を歌頌し、爾を讃揚し、爾を讃美し、爾に感謝し、爾が一切

<sup>おさ ところ おい なんぢ ふ おが とうぜん ぎ けだしなんぢ なんぢ どく</sup>  
治むる處に於て爾に伏し拜むは當然にして義なり、蓋爾と爾の獨

<sup>せいし なんぢ せいしん い がた し がた み べ はか べ なが</sup>  
生子と爾の聖神は、言い難く、知り難く、見る可からず、測る可からず、永

<sup>あ つね かわ しみ なんぢ われら む ゆう おちい もの また</sup>  
く在り、恒に變らざる神なり、爾は我等を無より有となし、陥りし者を復

<sup>おこ およ われら てん のぼ なんぢ らいせい くに たま いた ぼんじ</sup>  
起し、及び我等を天に升らしめて、爾が來世の國を賜うに至るまで萬事

<sup>おこな や これら ため およ われら し ところ し ところ あらわ ところ</sup>  
行いて止めず、此等の爲に、凡そ我等が知る所、知らざる所、顯れし所、

<sup>あらわ ところ われら たま しょおん ため われらなんぢ なんぢ どくせいし</sup>  
顯れざりし所の我等に賜わりし諸恩の爲に、我等爾と爾の獨生子と

<sup>なんぢ せいしん かんしゃ またこ ほうじ ため なんぢ かんしゃ なんぢこれ われら</sup>  
爾の聖神とに感謝す、又此の奉事の爲に爾に感謝す、爾之を我等の

<sup>て う あまん たま しか せんせん てんししゅおよ まんまん てんし</sup>  
手より領くるを甘じ給えり、然れども千千の天使首及び萬萬の天使、ヘル

<sup>およ りくよく もの たもく もの たか かけ もの つばさ そな もの</sup>  
ヴィム及びセラフィム、六翼の者、多目の者、高く翔る者、翼を具うる者

<sup>なんぢ まえ た</sup>  
は爾の前に立ちて、 )

司祭) <sup>かちうた うた よ さけ い</sup> 凱歌を歌い、籲び、叫びて曰う、

せ い せ い せ い な る しゅ サ ヴ ァ オ フ、 てん ち に  
 聖 い 聖 い 聖 い な る 主 サ ヴ ァ オ フ、 天 地  
 なん ぢ の こ お え い は あ ま ね し、 い と た か  
 爾 光 榮 い は あ ま ね し、 至 高  
 き に オ サ ン ナ、 しゅ の な に て き た る も の は  
 主 名 に て き た る 者  
 あ が め ほ め ら る、 い と た か き に  
 崇 讚 至 高  
 オ サ ン ナ。

司祭) ( 黙誦：人<sup>ひと</sup>を愛<sup>あい</sup>する主<sup>しゅ</sup>宰<sup>さい</sup>よ、我<sup>われ</sup>等<sup>ら</sup>も此<sup>こ</sup>の福<sup>ふく</sup>たる軍<sup>ぐん</sup>と偕<sup>とも</sup>に籲<sup>よ</sup>びて曰<sup>い</sup>う、聖<sup>せい</sup>なる哉<sup>かな</sup>、至<sup>し</sup>  
 聖<sup>せい</sup>なる哉<sup>かな</sup>、爾<sup>なんぢ</sup>と爾<sup>なんぢ</sup>の獨<sup>どく</sup>生子<sup>せいし</sup>と爾<sup>なんぢ</sup>の聖<sup>せい</sup>神<sup>しん</sup>、聖<sup>せい</sup>なる哉<sup>かな</sup>、至<sup>し</sup>聖<sup>せい</sup>なる哉<sup>かな</sup>、爾<sup>なんぢ</sup>  
 の光<sup>こう</sup>榮<sup>えい</sup>は威<sup>い</sup>嚴<sup>げん</sup>なり、爾<sup>なんぢ</sup>は爾<sup>なんぢ</sup>の世<sup>せ</sup>界<sup>かい</sup>を愛<sup>あい</sup>して、爾<sup>なんぢ</sup>の獨<sup>どく</sup>生子<sup>せいし</sup>を賜<sup>たま</sup>うに至<sup>いた</sup>り、  
 およこれしんものちんりんまぬかえいせいえかれきたおよわれら  
 凡<sup>お</sup>そ之<sup>てい</sup>を信<sup>せい</sup>ずる者<sup>ぜん</sup>に沈<sup>わた</sup>淪<sup>よ</sup>を免<sup>ただ</sup>れて永<sup>い</sup>生<sup>みづか</sup>を得<sup>おのれ</sup>せしむ、彼<sup>せ</sup>來<sup>かい</sup>りて、凡<sup>いのち</sup>そ我<sup>い</sup>等<sup>ち</sup>  
 爲<sup>ため</sup>に付<sup>わた</sup>しし夜<sup>よ</sup>、其<sup>その</sup>聖<sup>せい</sup>にして至<sup>し</sup>淨<sup>じょう</sup>無<sup>む</sup>玷<sup>てん</sup>なる手<sup>て</sup>に餅<sup>へい</sup>を取<sup>と</sup>り、感<sup>かん</sup>謝<sup>しゃ</sup>し、祝<sup>しゅく</sup>讚<sup>さん</sup>し、  
 成<sup>せい</sup>聖<sup>せい</sup>し、擘<sup>さ</sup>きて其<sup>その</sup>聖<sup>せい</sup>なる門<sup>もん</sup>徒<sup>と</sup>及<sup>お</sup>び使<sup>し</sup>徒<sup>た</sup>に予<sup>あ</sup>えて曰<sup>い</sup>えり、 )

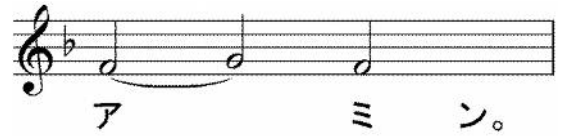
司祭) 取<sup>と</sup>りて食<sup>くら</sup>え、是<sup>これ</sup>我<sup>わ</sup>が體<sup>たい</sup>、爾<sup>なんぢ</sup>等<sup>ら</sup>の爲<sup>ため</sup>に擘<sup>さ</sup>かるる者<sup>もの</sup>、罪<sup>つみ</sup>の赦<sup>ゆるし</sup>を得<sup>え</sup>るを致<sup>いた</sup>す、

ア ミ ン。

司祭) ( 黙誦：同<sup>おなじ</sup>く晚<sup>ばん</sup>餐<sup>さん</sup>の後<sup>のち</sup>に爵<sup>しゃく</sup>を執<sup>と</sup>りて曰<sup>いわ</sup>く、 )

司祭) 皆<sup>みな</sup>之<sup>これ</sup>を飲<sup>の</sup>め、是<sup>これ</sup>我<sup>われ</sup>の新<sup>しん</sup>約<sup>やく</sup>の血<sup>ち</sup>、爾<sup>なんぢ</sup>等<sup>ら</sup>及<sup>お</sup>び衆<sup>しゅ</sup>くの人<sup>ひと</sup>の爲<sup>ため</sup>に流<sup>なが</sup>さるる者<sup>もの</sup>、罪<sup>つみ</sup>の赦<sup>ゆるし</sup>  
 を得<sup>え</sup>るを致<sup>いた</sup>す、





司祭) ( 黙誦: 故に我等此の救を施す誠、及び凡そ我等の爲に有りし事、即十  
 字架、墓、第三日の復活、天に升る事、右に坐する事、光榮なる再度の  
 降臨を記憶して、 )

司祭) 爾の賜を、爾の諸僕より、衆の爲一切の爲に爾に獻りて、

司祭) ( 黙誦: 我等復爾に此の靈智なる無血の奉事を獻じて、願ひ祈り切に求む、爾  
 の聖神を我等及び此の奠えたる祭品に遣し給え、 )

司祭) ( 黙誦: <sup>だいさんじ なんぢ しせいしん なんぢ しと つか しぜん しゅ これ われら と</sup>第三時に 爾の至聖神を 爾の使徒に遣わしし至善の主よ、之を我等より取

<sup>あ なか なおわれらなんぢ いの もの うち これ あらた かみ いさぎよ</sup>り上ぐること勿れ、尚我等 爾に祈る者の衷に之を新にせよ、神よ、潔

<sup>こころ われ つく ただ たましい われ うち あらた たま</sup>き心を我に造り、正しき 靈を我の衷に改め給え、

<sup>だいさんじ なんぢ しせいしん なんぢ しと つか しぜん しゅ これ われら</sup>第三時に 爾の至聖神を 爾の使徒に遣わしし至善の主よ、之を我等より

<sup>と あ なか なおわれらなんぢ いの もの うち これ あらた われ なんぢ</sup>取り上ぐること勿れ、尚我等 爾に祈る者の衷に之を新にせよ、我を 爾の

<sup>かんばせ お なか なんぢ せいしん われ と あ なか</sup>顔より逐うこと勿れ、爾の聖神を我より取り上ぐること勿れ、

<sup>だいさんじ なんぢ しせいしん なんぢ しと つか しぜん しゅ これ われら</sup>第三時に 爾の至聖神を 爾の使徒に遣わしし至善の主よ、之を我等より

<sup>と あ なか なおわれらなんぢ いの もの うち これ あらた</sup>取り上ぐること勿れ、尚我等 爾に祈る者の衷に之を新にせよ、 )

司祭) <sup>こ へい もつ なんぢ そんたい な</sup>此の餅を將て、 爾のハリストスの尊體と成し、アミン。

<sup>こ しゃくちゆう もの もつ なんぢ そんけつ な</sup>此の爵中の者を將て、 爾のハリストスの尊血と成し、アミン。

<sup>なんぢ せいしん もつ これ へんか</sup>爾の聖神を以て之を變化せよ、アミン。アミン。アミン。

( 黙誦: <sup>ねがわ これ う もの ため たましい けいせい しょざい ゆるし なんぢ</sup>願くは此は領くる者の爲に、 靈の警醒となり、諸罪の赦となり、 爾

<sup>せいしん たいごう てんごく え なんぢ お ゆうかん しんあん</sup>が聖神の體合となり、天國を得ることとなり、 爾に於ける勇敢となり、審案

<sup>あるい ていざい</sup>或は定罪とならざらんことを、

<sup>また れいち ほうじ しん もつ ねむ げんそ れつそ たいそ よげんしゃ しと</sup>又この靈智なる奉事を、信を以て寝りし元祖・列祖・太祖・預言者・使徒・

<sup>でんどうしゃ ふくいんしゃ ちめいしゃ ひょうしんしゃ せつせいしゃ およ およ しん もつ おわ</sup>傳道者・福音者・致命者・表信者・節制者、及び凡そ信を以て終

<sup>ぎ たましい ため なんぢ けん</sup>りし義なる 靈の爲に 爾に獻ず、 )

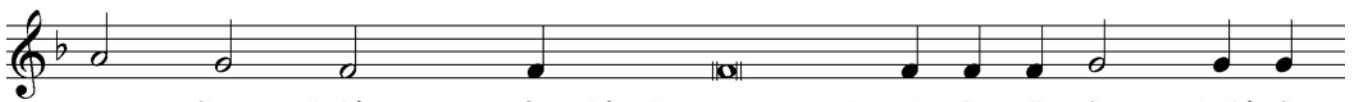
司祭) <sup>こと しせいしけつ いた さんび われら こうえい ぢよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ</sup>特に至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マ

<sup>ため</sup>リヤの爲、

【 常に福 】



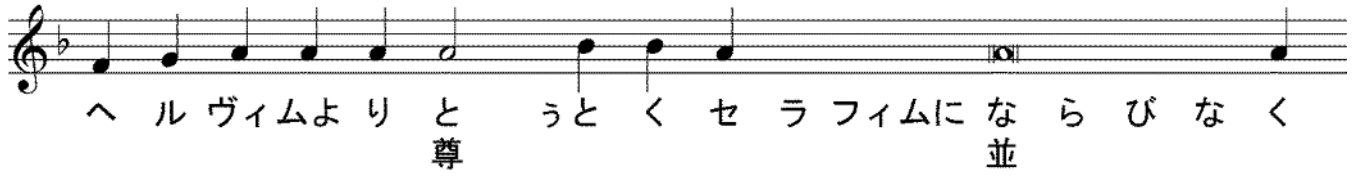
つねにさいわいにしてまったくきずなき  
常 福 全 瑕



しょうしんぢよ。わがかみのははたるなんぢを  
生 神 女 我 神 母 爾



さ い わ い な り と と の う る は ま こ と に あ た  
福 称 真 當



ヘ ル ヴ ィ ム よ り と う と く セ ラ フ ィ ム に な ら び な く  
尊 並



さ か え 、 み さ お を や ぶ ら ず し て か み こ と  
榮 貞 操 壊 神 言



ば を う み し 、 じ つ の し ょ う し ん ぢ よ た る な ん ぢ  
生 實 生 神 女 爾



司祭) ( 黙誦: <sup>せいよげんしゃ</sup> 聖預言者・<sup>ぜんく</sup> 前駆・<sup>じゅせん</sup> 授洗イオアン、<sup>こうえい</sup> 光榮にして<sup>さんび</sup> 讚美たる<sup>せいしと</sup> 聖使徒、及び<sup>およ</sup> 爾が

<sup>しよせいじん</sup> 諸聖人の<sup>ため</sup> 爲に<sup>けん</sup> 獻ず、<sup>かみ</sup> 神よ、<sup>かれら</sup> 彼等の<sup>きとう</sup> 祈禱に<sup>よ</sup> 因りて<sup>われら</sup> 我等を<sup>かえり</sup> 顧み、<sup>ならび</sup> 並に<sup>およ</sup> 凡そ

<sup>えいせい</sup> 永生の<sup>ふくかつ</sup> 復活の<sup>のぞみ</sup> 望を<sup>いだ</sup> 懐きて<sup>ねむ</sup> 寝りし<sup>もの</sup> 者を<sup>きおく</sup> 記憶して、<sup>かれら</sup> 彼等を<sup>なんぢ</sup> 爾が<sup>かんばせ</sup> 顔の<sup>ひかり</sup> 光

<sup>てら</sup> の<sup>ところ</sup> 照す<sup>あんそく</sup> 所に<sup>たま</sup> 安息せしめ<sup>たま</sup> 給え、

又<sup>また</sup> 爾に<sup>なんぢ</sup> 禱る、<sup>いの</sup> 主よ、<sup>しゅ</sup> 爾が<sup>なんぢ</sup> 眞實の<sup>しんじつ</sup> 言を<sup>ことば</sup> 正しく<sup>ただ</sup> 傳うる<sup>つた</sup> 正<sup>せいきょうしゃ</sup> 教者の<sup>およ</sup> 凡の

<sup>しゅきょうひん</sup> 主教品、<sup>およ</sup> 凡の<sup>しさいひん</sup> 司祭品、<sup>よ</sup> ハリストスに<sup>ほさいひん</sup> 因る<sup>およ</sup> 輔祭品、<sup>ことごと</sup> 及び<sup>しんぴん</sup> 悉くの<sup>しんぴん</sup> 神品を

<sup>きおく</sup> 記憶せよ、

又<sup>また</sup> 此の<sup>れいち</sup> 靈智なる<sup>ほうじ</sup> 奉事を、<sup>ぜんせかい</sup> 全世界の<sup>ため</sup> 爲、<sup>せい</sup> 聖・<sup>こう</sup> 公・<sup>しと</sup> 使徒の<sup>きょうかい</sup> 教會の<sup>ため</sup> 爲、<sup>けつじょう</sup> 潔淨

にして<sup>とうと</sup> 尊く<sup>いのち</sup> 生を<sup>わた</sup> 度る<sup>もの</sup> 者の<sup>ため</sup> 爲、<sup>わ</sup> 我が<sup>くに</sup> 國の<sup>てんのう</sup> 天皇<sup>およ</sup> 及び<sup>くに</sup> 國を<sup>つかさど</sup> 司る<sup>もの</sup> 者の<sup>ため</sup> 爲に

爾に<sup>なんぢ</sup> 獻ず、<sup>けん</sup> 主よ、<sup>しゅ</sup> 彼等に<sup>かれら</sup> 泰平の<sup>たいへい</sup> 國政を<sup>こくせい</sup> 賜え、<sup>たま</sup> 我等も<sup>われら</sup> 彼等の<sup>かれら</sup> 平和により、<sup>へいわ</sup>

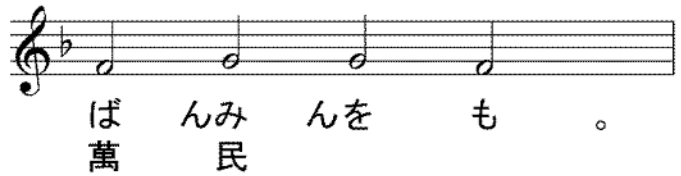
<sup>およ</sup> 凡の<sup>けいけん</sup> 敬虔と<sup>けつじょう</sup> 潔淨とを<sup>もつ</sup> 以て、<sup>てんせいあんぜん</sup> 恬静安然にして<sup>いのち</sup> 生を<sup>わた</sup> 度らんが<sup>ため</sup> 爲なり、 )

司祭) 主よ、殊に<sup>しゅ</sup> 教會を<sup>こと</sup> 司る<sup>きょうかい</sup> 尊貴なる<sup>つかさど</sup> 我等の<sup>そんき</sup> 全日本<sup>われら</sup> の<sup>ぜんにっぽん</sup> 府主<sup>ふしゅきょう</sup> 教<sup>そんき</sup> ダニイル、<sup>われ</sup> 尊貴なる<sup>そんき</sup> 我

ら せんだい だいしゅきょう きおく かれら へいあん ぶなん そんき そうけん ちようじゅ  
等の仙台の大主教 セラフィムを記憶し、彼等を平安・無難・尊貴・壮健・長壽

もの およ なんぢ しんじつ ことば ただ つた もの なんぢ せい きょうかい あた  
なる者、及び爾が眞實の言を正しく傳うる者として、爾の聖なる教會に與え

たま  
給え、



司祭) ( 黙誦：主よ、我等が居る所しゅ われら おと ところ こ まち およそ まち ちほう およ しん もつ こ うちの此の都邑と凡の都邑と地方、及び信を以て此の中

に居る者を記憶せよ、主よ、航海する者お もの きおく しゅ こうかい もの りょこう もの やまい うれ もの かん、旅行する者、病を患うる者、艱

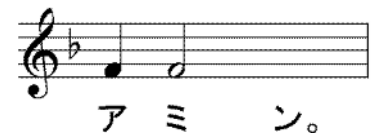
難に遭う者なん あ もの とりこ、擄となりし者もの およ かれら すくい きおく しゅ なんぢ しよせい、及び彼等の救を記憶せよ、主よ、爾の諸聖

堂に物を獻りどう もの たてまつ ぜんぎょう おこな もの およ ひんしや きねん もの きおく およ、善業を行う者、及び貧者を記念する者を記憶し、及

び我等衆人に爾の憐われらしゅうじん なんぢ あわれみ た たまを垂れ給え、 )

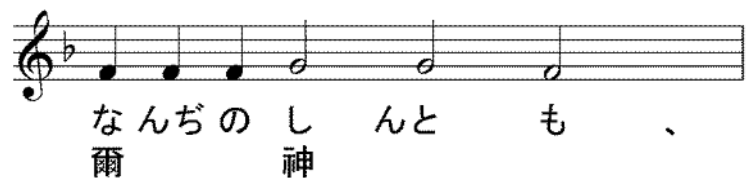
司祭) 並に我等にならび われら くち かつ ころろ かつ なんぢちち こ せいしん しそんしげん な さん、口を一にし心を一にして、爾父と子と聖神の至尊至嚴の名を讃

えいさんしょう  
榮讚頌するを賜え、今も何時も世に、



司祭) 願ねがわ おおい かみ わ きゅうしゅくは大なる神、我が救主あわれみ なんぢしゅうじん とも あイイススハリストスの憐は、爾衆人と偕あに在ら

んことを、

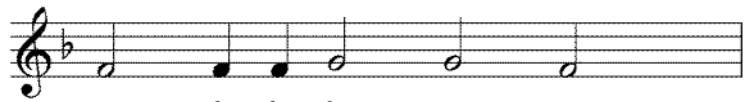


【 増聯禱 】

司祭) 我等諸聖人われらしよせいじん きおくを記憶して、復又安和またまたあんわにして主しゅ いのに禱らん、



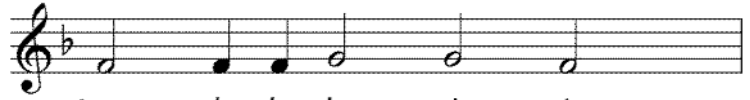
司祭) 已すで けんに獻およ せいぜられ及び聖とうと さいひんにせられし尊ためき祭品しゅ いのの爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

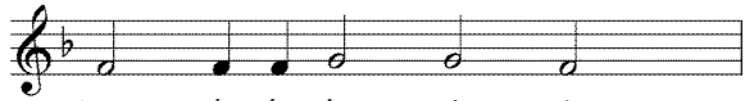
司祭) <sup>ひと あい わ かみ これ そのせい てんじょう むけい さいだん お ぞくしん けいこう</sup> 人を愛する我が神が、之を其聖なる天上の無形の祭壇に置き、屬神の馨香と

<sup>う われら むく しんみょう おんちよう せいしん たまもの くだ ため いの</sup>して享け、我等に報いて、神妙の恩寵と聖神の賜とを降すが爲に禱らん、



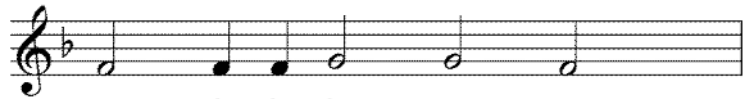
しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) <sup>われら もろもろ うれい いかり あやうき まぬか ため しゅ いの</sup>我等諸の憂愁と忿怒と危難とを免るるが爲に主に禱らん、



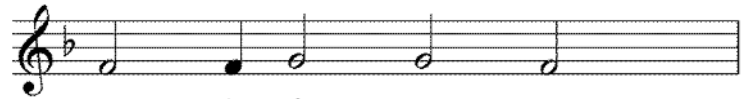
しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) <sup>かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも</sup>神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



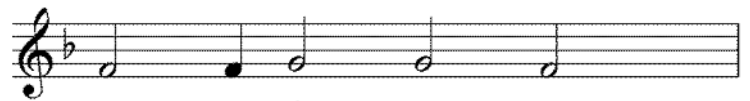
しゅ あわれ め よ 。  
主 憐

司祭) <sup>こ ひ じゅんぜん せいせい へいあん むざい しゅ もと</sup>此の日の純全、成聖、平安、無罪ならんことを主に求む、



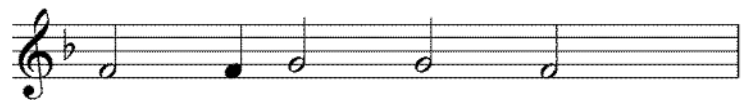
しゅ たま え よ 。  
主 賜

司祭) <sup>へいあん てんし ただ きょうどうし わ れいたい しゅごしや たま しゅ もと</sup>平安の天使、正しき教導師、吾が靈體の守護者を賜わんことを主に求む



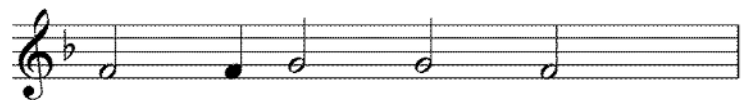
しゅ たま え よ 。  
主 賜

司祭) <sup>われら つみ あやまち なだ ゆる しゅ もと</sup>我等の罪と過とを宥め赦さんことを主に求む、



しゅ たま え よ 。  
主 賜

司祭) <sup>われら たましい ぜん えき こと およ せかい へいあん たま しゅ もと</sup>我等の靈に善にして益ある事、及び世界に平安を賜わんことを主に求む、



しゅ たま え よ 。  
主 賜

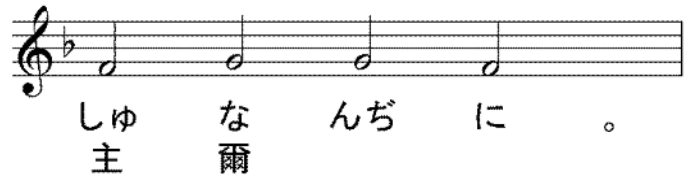
司祭) <sup>われら いのち よじつ へいあん つうかい もつ おわ しゅ もと</sup>我等の生命の餘日を平安と痛悔とを以て終らんことを主に求む、



司祭) <sup>われら いのち おわり かな やまい はぢ へいあん およ</sup>我等の生命の終がハリストニアニンに適い、疾なく、耻なく、平安なること、及び  
<sup>おそ しんばん おい よろ こたえ たま もと</sup>ハリストスの畏るべき審判に於て宜しき對をなすを賜わんことを求む、



司祭) <sup>しん どういつ せいしん たいごう もと われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび</sup>信の同一と聖神の體合とを求めて、我等己の身及び互に各の身を以て、并  
<sup>ことごと われら いのち もつ かみ いたく</sup>に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、



司祭) ( 黙誦: <sup>ひと あい しゅさい われら わ ことごと いのち のぞみ なんぢ ゆだ ねが</sup>人を愛する主宰よ、我等は我が悉くの生命と望とを爾に委ねて、願  
<sup>いの せつ もと われら きよ りょうしん もつ なんぢ てんじょう おそ きみつ</sup>い祈り切に求む、我等に、淨き良心を以て、爾が天上の畏るべき機密、  
<sup>こ せい ぞくしん えん あづか たま こ つみ ゆるし あやまち надめ</sup>此の聖せられたる屬神の筵に與るを賜いて、此れが罪の赦、過の宥、  
<sup>せいしん たいごう てんごく しぎょう なんぢ お ゆうかん しんあんあるい ていざい</sup>聖神の體合、天國の嗣業、爾に於ける勇敢となりて、審案或は定罪  
<sup>とならざるを いた たま</sup>とならざるを致させ給え、 )

【 天主經 】

司祭) <sup>しゅさい われら いさみ もつ つみ え あえ なんぢてん かみちち よ い たま</sup>主宰よ、我等に勇を以て、罪を獲ずして、敢て爾天の神父を籲びて言うを賜え、



が ごとく ちにも おこなわれん。わが にち よう  
 如 地 行 我 日 用  
 の か て を こんにち われらに あた え た ま え 。  
 糧 今日 我 等 與 給  
 われらに おいめ ある もの を われら ゆる すが ご  
 我 等 債 者 我 等 免 如  
 と く 、 われら の おいめ を ゆる した ま  
 我 等 債 免 給  
 え 。 われら を いざ ない に みち び か ず 、  
 我 等 誘 導  
 な お われら を きょう あく より す く いた ま  
 猶 我 等 凶 惡 救 給  
 え 。

司祭) <sup>けだしくに けんとう こうえい なんぢちち こせいしん き いま いつ よよ</sup> 蓋 國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、

ア ミ ン。

司祭) <sup>しゅうじん へいあん</sup> 衆人に平安、

なんぢの し んにも 。  
爾 神

司祭) <sup>なんぢら こうべ しゅ かが</sup> 爾等の首を主に屈めよ、

しゅ な んぢ に 。  
主 爾

司祭) ( 黙誦: <sup>み</sup>見る<sup>べ</sup>可<sup>お</sup>から<sup>そ</sup>ざる<sup>は</sup>王<sup>、</sup>其<sup>お</sup>量<sup>う</sup>り<sup>そ</sup>難<sup>の</sup>き<sup>は</sup>能<sup>が</sup>力<sup>た</sup>を<sup>の</sup>以<sup>う</sup>て<sup>り</sup>萬<sup>も</sup>有<sup>つ</sup>を<sup>ば</sup>畫<sup>ん</sup>定<sup>ゆ</sup>し<sup>、</sup>其<sup>か</sup>慈<sup>く</sup>憐<sup>て</sup>の<sup>い</sup>多<sup>そ</sup>の<sup>の</sup>じ<sup>れ</sup>ん<sup>ん</sup> おお

<sup>も</sup>つ<sup>ば</sup>ん<sup>ぶ</sup>つ<sup>む</sup> ゆう<sup>し</sup>ゆ<sup>わ</sup>れ<sup>ら</sup>なん<sup>ぢ</sup> <sup>か</sup>ん<sup>し</sup>や<sup>し</sup>ゆ<sup>さ</sup>い<sup>なん</sup>ぢ<sup>き</sup>を<sup>を</sup>以<sup>を</sup>て<sup>を</sup>萬<sup>を</sup>物<sup>を</sup>を<sup>を</sup>無<sup>を</sup>より<sup>を</sup>有<sup>を</sup>とな<sup>を</sup>し<sup>し</sup>主<sup>よ、</sup>我<sup>を</sup>等<sup>を</sup>爾<sup>を</sup>に<sup>を</sup>感<sup>を</sup>謝<sup>を</sup>す<sup>、</sup>主<sup>を</sup>宰<sup>を</sup>よ<sup>、</sup>爾

<sup>み</sup>づ<sup>か</sup>なん<sup>ぢ</sup> <sup>こ</sup>う<sup>べ</sup> <sup>か</sup>が<sup>も</sup>の<sup>て</sup>ん<sup>か</sup>え<sup>り</sup> <sup>た</sup>ま<sup>け</sup>だ<sup>し</sup>け<sup>つ</sup>に<sup>く</sup> <sup>か</sup>が<sup>あ</sup>ら<sup>ず</sup>、

<sup>す</sup>な<sup>わ</sup>ち<sup>なん</sup>ぢ<sup>お</sup>そ<sup>か</sup>み<sup>か</sup>が<sup>ゆ</sup>え<sup>し</sup>ゆ<sup>さ</sup>い<sup>なん</sup>ぢ<sup>こ</sup>こ<sup>そ</sup>な<sup>も</sup>の<sup>わ</sup>れ

乃<sup>を</sup>爾<sup>を</sup>畏<sup>を</sup>る<sup>を</sup>べき<sup>を</sup>神<sup>を</sup>に<sup>を</sup>屈<sup>を</sup>め<sup>り</sup>、<sup>を</sup>故<sup>を</sup>に<sup>を</sup>主<sup>を</sup>宰<sup>を</sup>よ<sup>、</sup>爾<sup>を</sup>は<sup>を</sup>此<sup>を</sup>に<sup>を</sup>奠<sup>を</sup>え<sup>た</sup>る<sup>を</sup>者<sup>を</sup>を、<sup>を</sup>我

<sup>ら</sup>し<sup>ゆ</sup>う<sup>じ</sup>ん<sup>ぜ</sup>ん<sup>た</sup>め<sup>か</sup>く<sup>じ</sup>ん<sup>ひ</sup>つ<sup>よ</sup>う<sup>お</sup>う<sup>ひ</sup>と<sup>し</sup> <sup>わ</sup>か<sup>こ</sup>う<sup>か</sup>い<sup>も</sup>の<sup>と</sup>も

等<sup>を</sup>衆<sup>を</sup>人<sup>を</sup>の<sup>を</sup>善<sup>を</sup>の<sup>を</sup>爲<sup>を</sup>に<sup>を</sup>、<sup>を</sup>各<sup>を</sup>人<sup>を</sup>の<sup>を</sup>必<sup>を</sup>要<sup>を</sup>に<sup>を</sup>應<sup>を</sup>じ<sup>て</sup> <sup>を</sup>等<sup>を</sup>く<sup>を</sup>頒<sup>を</sup>ち<sup>、</sup>航<sup>を</sup>海<sup>を</sup>する<sup>を</sup>者<sup>を</sup>と<sup>を</sup>偕

<sup>こ</sup>う<sup>か</sup>い<sup>り</sup>よ<sup>こ</sup>う<sup>も</sup>の<sup>と</sup>も<sup>り</sup>よ<sup>こ</sup>う<sup>れ</sup>い<sup>た</sup>い<sup>い</sup>し<sup>や</sup>まい<sup>う</sup>れ<sup>も</sup>の

に<sup>を</sup>航<sup>を</sup>海<sup>を</sup>し<sup>、</sup>旅<sup>を</sup>行<sup>を</sup>する<sup>を</sup>者<sup>を</sup>と<sup>を</sup>偕<sup>を</sup>に<sup>を</sup>旅<sup>を</sup>行<sup>を</sup>し<sup>、</sup>靈<sup>を</sup>體<sup>を</sup>の<sup>を</sup>醫<sup>を</sup>師<sup>を</sup>と<sup>を</sup>して<sup>、</sup>病<sup>を</sup>を<sup>を</sup>患<sup>を</sup>う<sup>る</sup>者

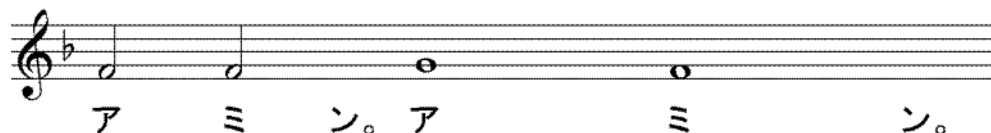
<sup>い</sup>や<sup>た</sup>ま<sup>を</sup>醫<sup>を</sup>し<sup>給</sup>え<sup>、</sup> )

司祭) <sup>なん</sup>ぢ<sup>ど</sup>く<sup>せ</sup>い<sup>し</sup> <sup>お</sup>ん<sup>ち</sup>ょう<sup>じ</sup>れ<sup>ん</sup> <sup>じ</sup>ん<sup>あ</sup>い<sup>よ</sup> <sup>なん</sup>ぢ<sup>か</sup>れ<sup>し</sup>せ<sup>い</sup>し<sup>ぜ</sup>ん<sup>い</sup>の<sup>ち</sup>

爾<sup>を</sup>が<sup>を</sup>獨<sup>を</sup>生<sup>を</sup>子<sup>を</sup>の<sup>を</sup>恩<sup>を</sup>寵<sup>を</sup>と<sup>を</sup>慈<sup>を</sup>憐<sup>を</sup>と<sup>を</sup>仁<sup>を</sup>愛<sup>を</sup>と<sup>を</sup>に<sup>を</sup>因<sup>を</sup>り<sup>て</sup>な<sup>り</sup>、<sup>を</sup>爾<sup>を</sup>は<sup>を</sup>彼<sup>を</sup>と<sup>を</sup>至<sup>を</sup>聖<sup>を</sup>至<sup>を</sup>善<sup>を</sup>に<sup>を</sup>して<sup>を</sup>生<sup>を</sup>命

<sup>ほ</sup>ど<sup>こ</sup> <sup>なん</sup>ぢ<sup>し</sup>ん<sup>と</sup>も<sup>さん</sup>よう<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>つ<sup>よ</sup>よ

を<sup>を</sup>施<sup>を</sup>す<sup>を</sup>爾<sup>を</sup>の<sup>を</sup>神<sup>を</sup>と<sup>を</sup>偕<sup>を</sup>に<sup>を</sup>讚<sup>を</sup>揚<sup>を</sup>せ<sup>ら</sup>る<sup>、</sup>今<sup>を</sup>も<sup>を</sup>何<sup>を</sup>時<sup>を</sup>も<sup>を</sup>世<sup>を</sup>に



司祭) ( 黙誦: <sup>し</sup>ゆ<sup>わ</sup>れ<sup>ら</sup> <sup>か</sup>み<sup>なん</sup>ぢ<sup>せ</sup>い<sup>す</sup>ま<sup>い</sup> <sup>なん</sup>ぢ<sup>く</sup>に<sup>こ</sup>う<sup>え</sup>い<sup>ほ</sup>う

主<sup>を</sup>イ<sup>を</sup>ス<sup>を</sup>ス<sup>を</sup>ハ<sup>を</sup>リ<sup>を</sup>ス<sup>を</sup>ト<sup>を</sup>ス<sup>を</sup>我<sup>を</sup>等<sup>を</sup>の<sup>を</sup>神<sup>を</sup>よ<sup>、</sup>爾<sup>を</sup>の<sup>を</sup>聖<sup>を</sup>なる<sup>を</sup>住<sup>を</sup>所<sup>を</sup>と<sup>を</sup>爾<sup>を</sup>が<sup>を</sup>國<sup>を</sup>の<sup>を</sup>光<sup>を</sup>榮<sup>を</sup>の<sup>を</sup>寶

<sup>ぎ</sup>座<sup>を</sup>より<sup>を</sup>眷<sup>を</sup>み<sup>を</sup>給<sup>を</sup>え<sup>、</sup>上<sup>を</sup>に<sup>を</sup>は<sup>を</sup>父<sup>を</sup>と<sup>を</sup>偕<sup>を</sup>に<sup>を</sup>坐<sup>を</sup>し<sup>、</sup>此<sup>を</sup>に<sup>を</sup>は<sup>を</sup>見<sup>を</sup>え<sup>ず</sup>して<sup>を</sup>我<sup>を</sup>等<sup>を</sup>と<sup>を</sup>偕<sup>を</sup>に<sup>を</sup>居<sup>を</sup>る<sup>を</sup>者<sup>を</sup>よ<sup>、</sup>

<sup>き</sup>た<sup>わ</sup>れ<sup>ら</sup> <sup>せ</sup>い<sup>なん</sup>ぢ<sup>け</sup>ん<sup>の</sup>う<sup>て</sup> <sup>も</sup>つ<sup>なん</sup>ぢ<sup>し</sup>じ<sup>ょう</sup> <sup>たい</sup> <sup>し</sup>そ<sup>ん</sup> <sup>ち</sup>

來<sup>を</sup>り<sup>て</sup>我<sup>を</sup>等<sup>を</sup>を<sup>を</sup>聖<sup>を</sup>に<sup>を</sup>し<sup>、</sup>爾<sup>を</sup>の<sup>を</sup>權<sup>を</sup>能<sup>を</sup>の<sup>を</sup>手<sup>を</sup>を<sup>を</sup>以<sup>を</sup>て<sup>、</sup>爾<sup>を</sup>が<sup>を</sup>至<sup>を</sup>淨<sup>を</sup>の<sup>を</sup>體<sup>を</sup>と<sup>を</sup>至<sup>を</sup>尊<sup>を</sup>の<sup>を</sup>血<sup>を</sup>と

<sup>わ</sup>れ<sup>ら</sup> <sup>さ</sup>づ<sup>ま</sup>た<sup>わ</sup>れ<sup>ら</sup> <sup>も</sup>つ<sup>し</sup>ゆ<sup>う</sup>じ<sup>ん</sup> <sup>さ</sup>づ<sup>た</sup>ま

を<sup>を</sup>我<sup>を</sup>等<sup>を</sup>に<sup>を</sup>授<sup>を</sup>け<sup>、</sup>又<sup>を</sup>我<sup>を</sup>等<sup>を</sup>を<sup>を</sup>以<sup>を</sup>て<sup>を</sup>衆<sup>を</sup>人<sup>を</sup>に<sup>を</sup>授<sup>を</sup>け<sup>給</sup>え<sup>、</sup>

<sup>か</sup>み<sup>わ</sup>れ<sup>が</sup>い<sup>に</sup>ん<sup>き</sup>よ<sup>わ</sup>れ<sup>あ</sup>わ<sup>れ</sup> <sup>た</sup>ま<sup>か</sup>み<sup>わ</sup>れ<sup>が</sup>い<sup>に</sup>ん<sup>き</sup>よ<sup>わ</sup>れ<sup>あ</sup>わ<sup>れ</sup>

神<sup>を</sup>よ<sup>を</sup>我<sup>を</sup>罪<sup>を</sup>人<sup>を</sup>を<sup>を</sup>淨<sup>を</sup>めて<sup>、</sup>我<sup>を</sup>を<sup>を</sup>憐<sup>を</sup>み<sup>を</sup>給<sup>を</sup>え<sup>、</sup>神<sup>を</sup>よ<sup>を</sup>我<sup>を</sup>罪<sup>を</sup>人<sup>を</sup>を<sup>を</sup>淨<sup>を</sup>めて<sup>、</sup>我<sup>を</sup>を<sup>を</sup>憐

<sup>た</sup>ま<sup>か</sup>み<sup>わ</sup>れ<sup>が</sup>い<sup>に</sup>ん<sup>き</sup>よ<sup>わ</sup>れ<sup>あ</sup>わ<sup>れ</sup> <sup>た</sup>ま

み<sup>を</sup>給<sup>を</sup>え<sup>、</sup>神<sup>を</sup>よ<sup>を</sup>我<sup>を</sup>罪<sup>を</sup>人<sup>を</sup>を<sup>を</sup>淨<sup>を</sup>めて<sup>、</sup>我<sup>を</sup>を<sup>を</sup>憐<sup>を</sup>み<sup>を</sup>給<sup>を</sup>え<sup>、</sup> )

司祭) <sup>つ</sup>つ<sup>し</sup> <sup>き</sup> <sup>せ</sup>い<sup>も</sup>の<sup>せ</sup>い<sup>ひ</sup>と

謹<sup>を</sup>み<sup>て</sup>聽<sup>を</sup>く<sup>べ</sup>し<sup>、</sup>聖<sup>を</sup>なる<sup>を</sup>物<sup>を</sup>は<sup>を</sup>聖<sup>を</sup>なる<sup>を</sup>人<sup>を</sup>に<sup>、</sup>







イイスハリスト スナ リ、ア ミ ン。

司祭) ( 黙誦：<sup>かみ こひつじ き わか</sup>神の 羔 は剖かれ分たる、<sup>かれ き ぶんり</sup>彼は剖かれて分離せず、<sup>つね くら</sup>恒に食われて永く<sup>なが つ</sup>盡き  
ず、<sup>すなわちう もの せい</sup>乃 領くる者を聖にす、 )

※<sup>レーゲント</sup>信徒領聖まで、聖歌指揮者の指示に随って歌うこと。

( 奉事規程が指定しているのは『主日領聖詞』、すなわち第148聖詠の第一節を繰り返し歌い、間に2節以下をアンティフォン形式で歌う、若しくは誦經する。本来は神品領聖と信徒領聖に区別はないので、同じ領聖詞を使う。日本正教会では通年「大パスハ領聖詞」を歌うことが多い。

日本正教会では神品領聖時に『主日領聖詞』に代えて、早課イルモス(其の週の調、又は生神女のカタワシヤ等)、スティヒラ等を歌うことが多いが、これに奉事規程上の根拠はない。

歌えるものがない場合は、聖詠經を誦經しても良い。 )

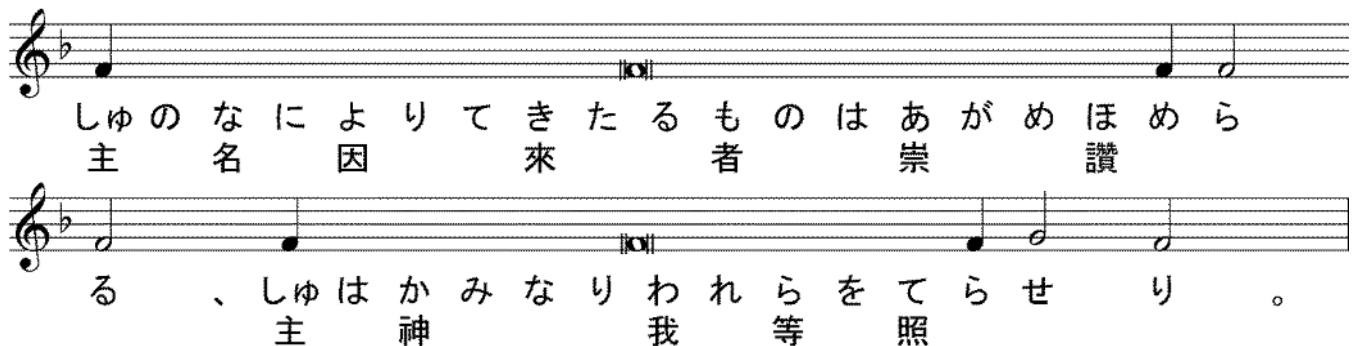
【 (大パスハ) 領聖詞 】



ハリストスのせ いた い を う け 、 ふ し の い づ み  
聖 體 領 不 死 泉  
を の め よ 。

【 信徒領聖 】

司祭) <sup>かみ おそ こころ しん もつ ちか きた</sup>神を畏るる 心 と 信 と を 以 て 近 づ き 來 れ、



しゅの な に よ り て き た る も の は あ が め ほ め ら  
主 名 因 來 者 崇 讚  
る 、 しゅ は か み な り わ れ ら を て ら せ り 。

全員) <sup>しゅ われしん か う みと なんぢ じつ せいかつ かみ こ ざいにん すく</sup>主よ我 信 じ、且つ承 け 認 め て、 爾 を 實 に ハ リ ス ト ス 生 活 の 神 の 子、 罪 人 を 救 う が

<sup>ため よ きた もの しゅうざいにん うちわれだいいち またしん こ すなわちなんぢ し</sup>爲 に 世 に 來 り し 者 と な す、 衆 罪 人 の 中 我 第 一 な り、 又 信 ず、 此 れ は 乃 爾 が 至

<sup>じょう たい こ すなわちなんぢ しそん ち ゆえ なんぢ いの われ あわれ わ じゆう</sup>淨 の 體、 此 れ は 乃 爾 が 至 尊 の 血 な り と、 故 に 爾 に 祈 る、 我 を 憐 み、 我 が 自 由

と自由ならずして、言と行にて、知ると知らずして、犯しし諸罪を赦し給え、並  
 に我に定罪なく、爾が至浄なる機密を領けて、罪の赦しと永生とを得るを致させ  
 給え、アミン。

神の子よ、今我を爾が機密の筵に與る者として容れ給え、蓋我爾の仇に機  
 密を告げざらん、また爾にイウダの如き接吻を爲さざらん、乃右盜の如く爾を承  
 け認めて曰う、主よ、爾の國に於て我を記憶せよと、主よ、祈る爾の聖なる機密を  
 領くるは、我が爲に審案或は定罪とならず、すなわち靈體の醫とならんことを、

【 (大パスハ) 領聖詞 】

※ 全員が領聖し畢り、元の位置に戻るまで繰り返す。

ハリストスのせいたいをうけ、ふしのいづみ  
 聖體領 不死泉  
 をのめよ。

司祭) ( 黙誦：ハリストスの復活を見て、聖なる主イイスス・獨罪なき者を拜むべし、ハ  
 リストスよ、我等爾の十字架を拜み、爾の聖なる復活を歌い讃む、爾  
 は我等の神なればなり、爾の外他の神を知らず、唯爾の名を稱う、信者よ、  
 皆來りてハリストスの聖なる復活を拜むべし、十字架にて喜は全世界に  
 のぞ臨めばなり、我等恒に主を讃め揚げて、其復活を崇め歌わん、主は十字架  
 に釘うたるるを忍びて、死を以て死を亡ししによる、  
 新なるイエルサリムよ、光り光れよ、主の光榮爾に輝けばなり、シオン  
 よ、今祝いて樂めよ、爾も潔き生神女よ、爾が生みし主の復活を  
 喜び給え、  
 嗚呼大にして至聖なるパスハ・ハリストスよ、嗚呼智慧と神の言と能力よ、爾

くに く らい ひ おい われら なおしたし なんぢ う たま  
が國の暮れざる日に於て、我等に猶親く爾を領けさせ給え

しゅ なんぢ しそん ち もつ なんぢ しよせいじん きとう よ ここ きおく  
主よ、爾が至尊の血を以て、爾が諸聖人の祈禱に因りて、此に記憶せら

もの しよざい あら たま  
れし者の諸罪を滌い給え、

ひと あい しゅさい わ たましい おんしゅ われら こ ひ おい なんぢ てん  
人を愛する主宰、我が靈の恩主よ、我等に、此の日に於ても、爾が天

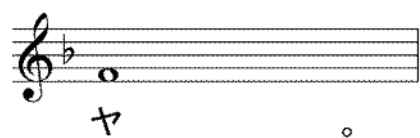
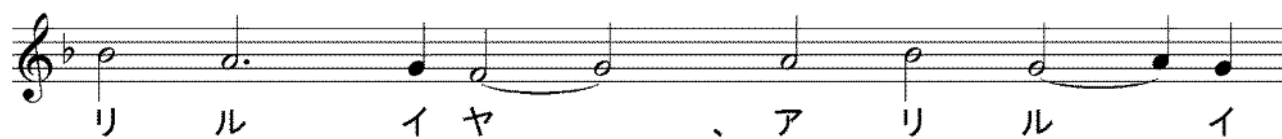
じょう ふし きみつ う たま なんぢ かんしゃ われら みち なお われら  
上の不死の機密を領けさせ給いしを爾に感謝す、我等の途を直くし、我等

しゅうじん なんぢ おそ おそ けんご われら いのち まも われら あゆみ かつ  
衆人を爾を畏るるの畏れに堅固にし、我等の生命を護り、我等の歩を固

たま こうえい しょうしんぢょ えいていどうぢょ およ なんぢ しよせいじん いのり  
め給え、光榮なる生神女・永貞童女マリヤ及び爾が諸聖人の祈と

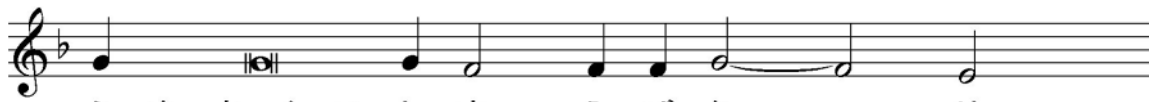
ねがい よ  
願とに因りてなり、 )

※ 全員が元の位置に戻って歌う準備ができてから「アリルイヤ」を歌う。



司祭) かみ なんぢ たみ すく およ なんぢ しぎょう ふく くだ  
神よ、爾の民を救い、及び爾の嗣業に福を降せ、





ら を す く い た ま え ば な り 。  
 等 救 給

司祭) ( 黙誦: 神よ、願<sup>かみ</sup>くは<sup>ねがわ</sup>爾<sup>なんぢ</sup>は<sup>しよてん</sup>諸<sup>うえ</sup>天<sup>あ</sup>の上<sup>なんぢ</sup>に<sup>こうえい</sup>舉<sup>ぜんち</sup>げ<sup>おお</sup>られ、爾<sup>われ</sup>の<sup>ら</sup>光<sup>かみ</sup>榮<sup>つね</sup>は<sup>あが</sup>全<sup>ほ</sup>地<sup>ら</sup>を<sup>かみ</sup>蔽<sup>つね</sup>わ<sup>あが</sup>ん、我<sup>ほ</sup>等<sup>ら</sup>の<sup>かみ</sup>神<sup>つね</sup>は<sup>あが</sup>恒<sup>ほ</sup>に<sup>ら</sup>崇<sup>かみ</sup>め<sup>つね</sup>讃<sup>あが</sup>め<sup>ほ</sup>らる、 )

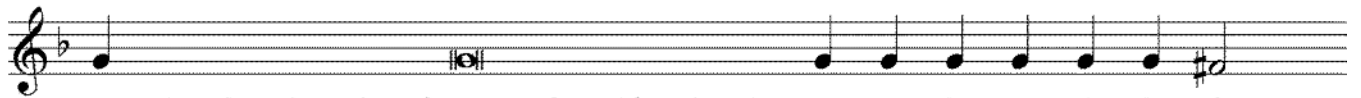
司祭) <sup>いま</sup>今<sup>いつ</sup>も<sup>よよ</sup>何<sup>よよ</sup>時<sup>よよ</sup>も<sup>よよ</sup>世<sup>よよ</sup>に、



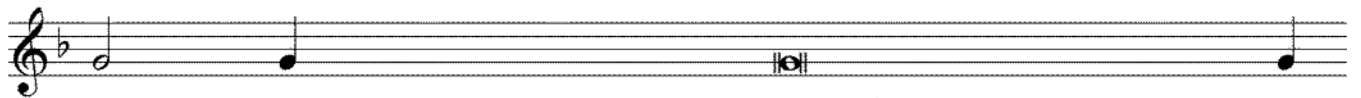
ア ミ ン。



しゅよ、なんぢのこうえいをうたわあんに  
 主 爾 光 榮 歌



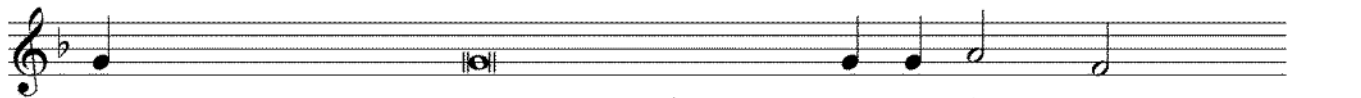
ほめうたをもつてわがくちにみたま  
 讃 歌 以 我 口 満 給



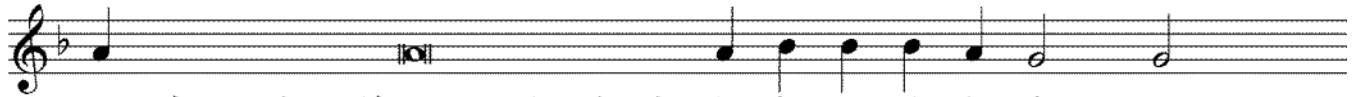
え、いのちをほどこすなんぢのせいなるきみ  
 生 命 施 爾 聖 機 密



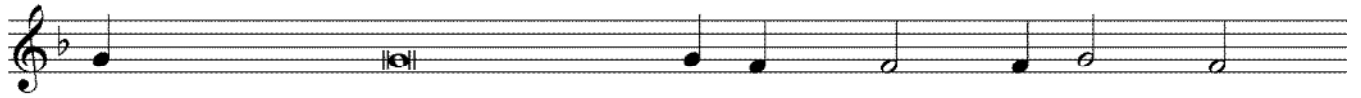
つをうくるをわれらにゆるせばなり。  
 領 我 等 許



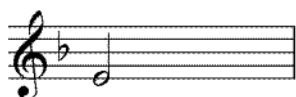
いのるわれらをいさぎよきにまもり、  
 祈 我 等 潔 護



ひびになんぢのみちをならわしめたまえ、  
 日 日 爾 道 習 給



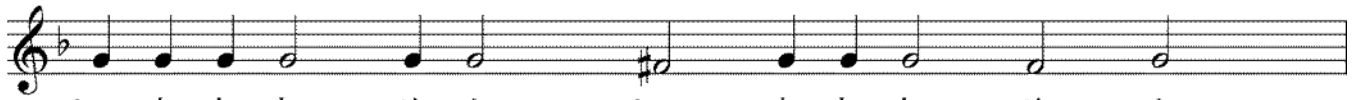
ア リ ル イ ヤ、ア リ ル イ ヤ、ア リ ル イ



ヤ。

司祭) <sup>つつし た しんせい しじょう ふし いのち ほどこ てんじょう おそ せい</sup> 謹みて立て、神聖・至淨・不死にして生命を施す天上の畏るべきハリストスの聖

<sup>きみつ う よろ しゅ かんしゃ</sup> 機密を領けて、宜しく主に感謝すべし、

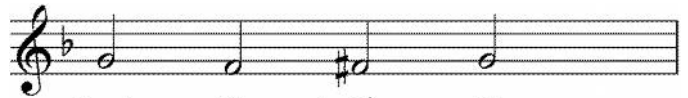


しゅ あわれ めよ、 しゅ あわれ めよ。  
主 憐 主 憐

司祭) <sup>かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも</sup> 神よ、爾の恩寵を以て我等を助け救い憐み護れよ、

司祭) <sup>こ ひ じゅんぜん せいせい へいあん むざい もと われらおのれ みおよ たがい</sup> 此の日の純全・成聖・平安・無罪ならんことを求めて、我等己の身及び互に

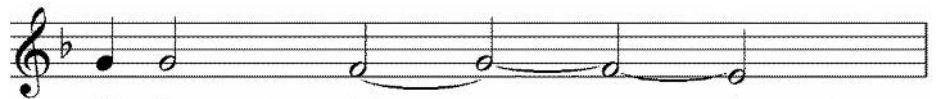
<sup>おのおの み もつ ならび ことごと われら いのち もつ かみ いたく</sup> 各の身を以て、并に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、



しゅ なんぢ に、  
主 爾

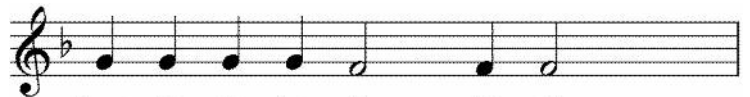
司祭) <sup>けだしなんぢ われら せいせい われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ</sup> 蓋爾は我等の成聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今も何時も世世

に、



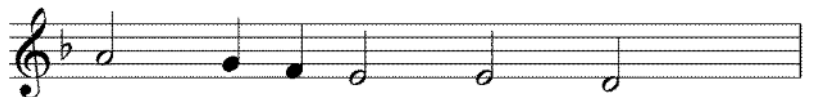
ア ミ ン、ア ミ ン。

司祭) <sup>へいあん い</sup> 平安にして出づべし、



しゅのなによりて、  
主 名 因

司祭) <sup>しゅ いの</sup> 主に禱らん、



しゅ あわれ めよ、  
主 憐

司祭) <sup>なんぢ さんよう もの ふく くだ およ なんぢ たの もの せい しゅ なんぢ たみ すく</sup> 爾を讚揚する者に福を降し、及び爾を恃む者を聖にする主よ、爾の民を救

<sup>およ なんぢ しぎょう ふく くだ なんぢ きょうかい じゅうまん まも なんぢ どう び</sup> い、及び爾の嗣業に福を降し、爾が教會の充滿を守り、爾が堂の美なるを

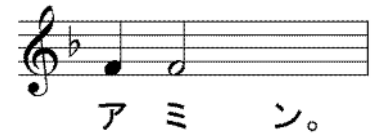
<sup>あい もの せい なんぢ しんせい ちから もつ かれら こうえい およ われらなんぢ たの</sup> 愛する者を聖にせよ、爾が神聖の力を以て彼等を光榮し、及び我等爾を恃む

<sup>もの のこ なか なんぢ せかい なんぢ しよきょうかい しよしさい わ くに てんのうおよ くに</sup> 者を遣す勿れ、爾の世界と爾の諸教會と諸司祭と、我が國の天皇及び國を

<sup>つかさど ものおよ なんぢ しゅうじん へいあん たま けだしおよそ ぜん ほどこし およそ ぜんび</sup> 司る者及び爾の衆人に平安を賜え、蓋凡の善なる施、凡の全備なる

たまもの うえ なんぢこうめい ちち くだ われらこうえい かんしゃ ふくはい なんぢちち  
賜は、上より、爾光明の父より降るなり、我等光榮・感謝・伏拜を爾父と

こ せいしん けん いま いつ よよ  
子と聖神に獻ず、今も何時も世に、



ねがわくはしゅのなはあがめほめられていまよ  
願 主 名 崇 讚 今

りよよにいたらん。ねがわくはしゅのなはあが  
世 世 至 願 主 名 崇

めほめられていまよりよよにいたらん。ねが  
讚 今 世 世 至 願

わくはしゅのなはあがめほめられていまよりよ  
主 名 崇 讚 今 世

よにいたらん。  
世 至

誦經) われいつ とき しゅ ほ あ かれ ほ つね わくち あ わ たましい しゅ  
我何れの時にも主を讃め揚げん、彼を讃むるは恒に我が口に在り、我が靈は主

もつ ほこ おんじゅう もの き たの われ とも しゅ どうと とも かれ な あが  
を以て誇らん、溫柔なる者は聞きて樂しまん。我と偕に主を尊め、偕に彼の名を崇

ほ われかつ しゅ たづ かれ われ き い わ すべ あやう われ まぬか  
め讚めん。我嘗て主を尋ねしに、彼は我に聆き納れて、我が都ての危きより我を免

れしめ給えり。目を擧げて彼を仰ぐ者は照されたり、彼等の面は愧を受けざらん。此の

まづ ものよ しゅ き い これ そのことごと かんなん すく しゅ つかい しゅ  
貧しき者呼びしに、主は聆き納れて、之を其悉くの艱難より救えり。主の使は主

おそ もの めぐ まも かれら たす あぢわ しゅ いか じんじ み かれ たの  
を畏るる者を環り衛りて、彼等を援く。味えよ、主の如何に仁慈なるを見ん、彼を恃

ひと さいわい およ しゅ せいじん しゅ おそ けだしかれ おそ もの とぼ  
む人は福なり。凡そ主の聖人よ、主を畏れよ、蓋彼を畏るる者は乏しきことな

し。 わか しし とぼ う ただしゅ たづ もの なん こうふく か  
少き獅子は乏しくして餓え、唯主を尋ぬる者は何の幸福にも缺くるなし。

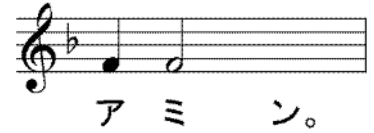
司祭) ( 黙誦: みづか ほうりつ しよよげんしゃ じょうまん ちち ていせい ことごと じょうまん  
親ら法律と諸預言者との成満にして、父の定制を悉く成満せ

わ かみ つね われら こころ よろこび たのしみ じょうまん たま  
しハリストス我が神よ、常に我等の心を喜と樂とに成満せしめ給え、

いま いつ よよ  
今も何時も世々に、 )

司祭) <sup>ねがわ</sup>願 <sup>しゅ</sup>くは主の降 <sup>こうふく</sup>福は、其 <sup>そのおんちよう</sup>恩 <sup>じんあい</sup>寵と仁愛とに因りて常に爾等 <sup>よ</sup>に在らん、今も何時も

<sup>よよ</sup>世々に、



※ もし永眠者記憶を続けて行う場合はP33【 <sup>リテイヤ</sup>永眠者の爲の熱衷祈祷】に飛ぶ。

【 通常の終結 】

司祭) <sup>かみわれら</sup>ハリストス神我等の <sup>たのみ</sup>恃よ、<sup>こうえい</sup>光榮は爾に歸す、<sup>なんち</sup>光榮は爾に歸す、

こう え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、 い ま も  
光 榮 父 子 聖 神 歸 今

い つ も よ よ に 、 ア ミ ン 。 し ゅ あ わ れ め 、 し ゅ  
何 時 世 世 主 憐 主

あ わ れ め 、 し ゅ あ わ れ め よ 、 ふ く を く だ  
憐 主 憐 福 降

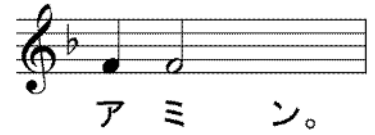
せ 。

司祭) <sup>し</sup>死より復 <sup>ふくかつ</sup>活せしハリストス我等の <sup>われら</sup>眞の神は、<sup>まこと</sup>其至 <sup>かみ</sup>淨なる母、<sup>そのしじょう</sup>光榮にして <sup>はは</sup>讚美たる <sup>こうえい</sup> <sup>さんび</sup>

<sup>せいしと</sup>聖使徒、<sup>われら</sup>我等の <sup>せいしんぶ</sup>聖神父 <sup>だいしゅきょうせいきんこう</sup>コンスタンチノーポリスの大主教 <sup>せいきんこう</sup>聖金口イオアン、

<sup>こくしょうほうしん</sup>克肖 <sup>わがしよしんぶ</sup>捧神なる我 <sup>およ</sup>諸 <sup>しよせいじん</sup>神父、( <sup>きとう</sup>某 ) 及び <sup>より</sup>諸 <sup>われら</sup>聖人の祈禱に因て我等を <sup>あわれ</sup>憐 <sup>たま</sup>み給わん。

<sup>ぜん</sup>善にして <sup>ひと</sup>人を <sup>あい</sup>愛する <sup>しゅ</sup>主なればなり、



【 萬壽詞 】

か み よ 、 わ が く に の て ん の う、お よ び  
神 我 國 天 皇 及

く に を つ か さ ど る も の 、 わ れ ら の ふ し ゆ  
國 司 者 我 等 府 主

き ょ う ダ ニ イ ル、だ い し ゆ き ょ う セ ラ フ ィ ム、お よ び  
教 大 主 教 及

こ と ご と く の せ い き ょ う の ハ リ ス テ ィ ア ニ ン ら を 、  
悉 正 教 等

い く と せ に も ま も り た ま え 。  
幾 歳 護 も り た ま え 。

( 祈禱終了、十字架接吻 )



【 永眠者の爲の熱<sup>リテイヤ</sup>衷<sup>ヤ</sup>祈<sup>ヤ</sup>禱<sup>ヤ</sup> 】

ひとをあいするきゆうせ いしゅよ、しせしぎ  
人 愛 救 世 主 死 義

じんのたましいとともに、なんぢがぼくひの  
人 靈 借 爾 僕 婢

たましいをやすんぜしめて、かれらを  
靈 安 彼 等

なんぢにあるふくらくのいのちに、まもり  
爾 在 福 樂 生 命 護

たまえ。しゅよなんぢがしよせいじんのあん  
給 主 爾 諸 聖 人 安

そくするところに、なんぢがぼくひのたま  
息 處 爾 僕 婢 靈

しいをやすんぜしめたたまえ。なんぢひとりひ  
安 給 爾 獨 人

とをあいするしゅなればなり。

こうえいはちちとことせいしんにきす、  
光 榮 父 子 聖 神 歸

なんぢはぢごくにくだりてつながれしものの  
爾 地 獄 降 繫 者

くさりをときたるかみなり。みづから  
鎖 釈 神 親

なんぢがぼくひのたましいをやすんぜしめ  
爾 僕 婢 靈 安

た ま え 。  
給

い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン 。  
今 何 時 世 世

ひ と り い さ ぎ よ く き ず な き ど う て い ぢ よ 、 た ね  
獨 潔 瑕 童 貞 女 種

な く し て か み を う み し も の よ 、 か れ ら の  
神 生 者 彼 等

た ま し い の す く わ れ ん こ と を い の り た ま  
靈 救 を 祈 給

え 。

【 重聯禱 】

司祭) <sup>かみ なんぢ おおい あわれみ より われら あわれ なんぢ いの き い あわれ</sup> 神よ、爾の大なる憐に因て我等を憐めよ、爾に禱る、聆き納れて憐めよ、

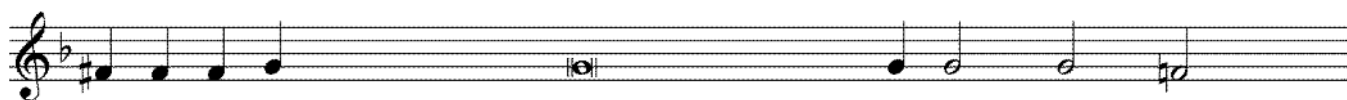
しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) <sup>またねむ かみ ぼくひ たましい あんそく ため およ かれら およ じゆう じゆう つみ</sup> 又寝りし神の奴婢(某)の靈の安息の爲、及び彼等に凡そ自由と自由ならざる罪

<sup>ゆる ため いの</sup>の赦されんが爲に禱る、

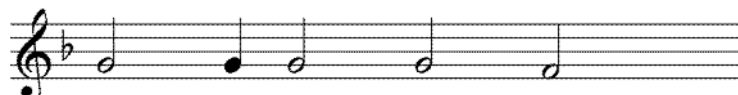
しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) <sup>しゅかみ かれら たましい しよぎじん あんそく ところ い たま いの</sup> 主神が彼等の靈を諸義人の安息する處に入れ給わんことを禱る、



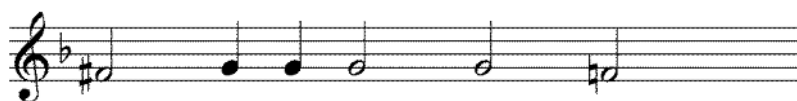
しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。  
 主 憐 主 憐 主 憐

司祭) <sup>かれら</sup> 彼等に <sup>かみ</sup> 神の <sup>あわれみ</sup> 憐 と <sup>てんごく</sup> 天國と <sup>しょざい</sup> 諸罪の <sup>ゆるし</sup> 赦 とを <sup>たま</sup> 賜わんことを、<sup>わがし</sup> ハリストス <sup>おうおよ</sup> 我死せざる王 及  
<sup>かみ</sup> び神に <sup>ねが</sup> 願う、



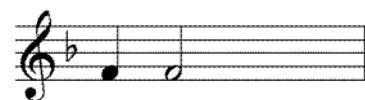
しゅ たま え よ。  
 主 賜

司祭) <sup>しゅ</sup> 主に <sup>いの</sup> 禱らん、



しゅ あわれめよ。  
 主 憐

司祭) <sup>もろもろ</sup> 諸の <sup>れいしん</sup> 靈神と <sup>もろもろ</sup> 諸の <sup>にくたい</sup> 肉體との <sup>かみ</sup> 神、<sup>し</sup> 死を <sup>ほろ</sup> 亡ぼし <sup>あくま</sup> 惡魔を <sup>むなし</sup> 虚くし、<sup>なんぢ</sup> 爾の <sup>せかい</sup> 世界に <sup>いのち</sup> 生命  
<sup>たま</sup> を <sup>しゅ</sup> 賜いし <sup>なんぢみづか</sup> 主よ、<sup>ねむ</sup> 爾 <sup>なんぢ</sup> 親ら <sup>ぼくひ</sup> 寢りし <sup>たましい</sup> 爾の <sup>ひか</sup> 僕婢(某)の <sup>ところ</sup> 靈 <sup>しげ</sup> を <sup>くさば</sup> 光る <sup>へいあん</sup> 處、<sup>茂き</sup> 草場、<sup>やまい</sup> 平安  
<sup>ところ</sup> の <sup>やまい</sup> 處、<sup>かなしみ</sup> 病と <sup>なげき</sup> 悲と <sup>とお</sup> 歎との <sup>ところ</sup> 遠ざかる <sup>あんそく</sup> 處に <sup>ぜん</sup> 安息せしめ、<sup>ひと</sup> 善にして <sup>あい</sup> 人を <sup>かみ</sup> 愛する <sup>神</sup> なる  
<sup>より</sup> に <sup>かれら</sup> 因て <sup>あるい</sup> 彼等が <sup>ことば</sup> 或は <sup>あるい</sup> 言、<sup>あるい</sup> 或は <sup>おこない</sup> 行、<sup>おもい</sup> 或は <sup>おか</sup> 思にて <sup>ことごと</sup> 犯しし <sup>つみ</sup> 悉くの <sup>ゆる</sup> 罪を <sup>たま</sup> 赦し給  
<sup>けだし</sup> え。蓋 <sup>ひと</sup> 人 <sup>い</sup> 一 <sup>つみ</sup> も <sup>おこな</sup> 生きて <sup>もの</sup> 罪を <sup>ただなんぢ</sup> 行 <sup>つみ</sup> わざる <sup>なんぢ</sup> 者なし、<sup>ぎ</sup> 唯 <sup>えいえん</sup> 爾 <sup>ぎ</sup> は <sup>えいえん</sup> 罪なし、<sup>ぎ</sup> 爾の <sup>義</sup> 義は <sup>永遠</sup> 永遠の <sup>義</sup> 義、  
<sup>なんぢ</sup> 爾の <sup>ことば</sup> 言は <sup>しんじつ</sup> 眞實なり。蓋 <sup>けだし</sup> ハリストス <sup>われら</sup> 我等の <sup>かみ</sup> 神よ、<sup>なんぢ</sup> 爾 <sup>ねむ</sup> は <sup>なんぢ</sup> 寢りし <sup>ぼくひ</sup> 爾の <sup>僕婢</sup> 僕婢(某)の  
<sup>ふくかつ</sup> 復活と <sup>いのち</sup> 生命と <sup>あんそく</sup> 安息なり。我等 <sup>われら</sup> 光榮を <sup>なんぢ</sup> 爾と <sup>なんぢ</sup> 爾の <sup>むげん</sup> 無原の <sup>ちち</sup> 父と <sup>しせいしぜん</sup> 至聖至善にして <sup>いのち</sup> 生命を  
<sup>ほどこ</sup> 施す <sup>なんぢ</sup> 爾の <sup>しん</sup> 神とに <sup>けん</sup> 獻ず、<sup>いま</sup> 今も <sup>いつ</sup> 何時も <sup>よよ</sup> 世々に、

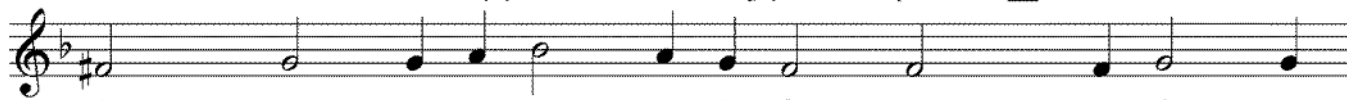


ア ミ ン。

【 永眠者の爲の小讃詞 】



ハリスト スよ、なんぢがぼくひのたましい  
 爾 僕 婢 靈



を、しよ せいじんとともに、やまい  
 諸 聖 人 偕 疾

も かな し み も な げ き も な く 、 お わ  
悲 歎 終

り な き い の ち の あ る と こ ろ に や す ン ぜ  
生 命 處 安

し め た ま え 。  
給

【 終 結 】

司祭) ハリストス<sup>かみわれら たのみ</sup>神我等の 侍<sup>よ</sup>、光 榮<sup>こうえい なんぢ き</sup>は 爾<sup>き</sup>に 歸<sup>こうえい なんぢ き</sup>す、光 榮<sup>こうえい なんぢ き</sup>は 爾<sup>き</sup>に 歸<sup>こうえい なんぢ き</sup>す、

こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、 い ま も  
光 榮 父 子 聖 神 歸 今

い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。しゅ あ わ れ め 、 しゅ  
何 時 世 世 主 憐 主

あ わ れ め 、 しゅ あ わ れ め よ 、 ふ く を く だ  
憐 主 憐 福 降

せ 。

司祭) 死より復 活<sup>し ふくかつ</sup>し、生ける者<sup>い もの</sup>と死せし者<sup>し もの</sup>を其 全 能<sup>そのぜんのう</sup>の手に保ち給<sup>て たも たま</sup>うハリストス<sup>われら まこと</sup>我等の 眞<sup>まこと</sup>の

神<sup>かみ</sup>は、其 至 淨<sup>そのしじょう</sup>なる母<sup>はは</sup>、光 榮<sup>こうえい</sup>にして讚 美<sup>さんび</sup>たる聖 使 徒<sup>せいしと</sup>、克 肖<sup>こくしょう</sup> 捧 神<sup>ほうしん</sup>なる我 諸 神 父<sup>わがしよしんぶ</sup>、

( 某 ) 及 び 諸 聖 人<sup>およ しよせいじん</sup>の祈 禱<sup>きとう</sup>に 因<sup>より</sup>て、寝 り し 僕 婢<sup>ねむ ぼくひ</sup>(某)の 靈<sup>たましい</sup> を 諸 義 人<sup>しよぎじん</sup>の住 所<sup>すまい</sup>に 入 れ、

アブラアム<sup>ふところ やす</sup>の 懷<sup>やす</sup> に 安 ぜ し め、諸 義 人<sup>しよぎじん</sup>の 列<sup>れつ</sup>に 加 え、及 び 我 等<sup>およ われら</sup>を 憐 み 給 わ ん。善<sup>あわれ たま</sup>に ぜん

して 人<sup>ひと</sup>を 愛 する 主<sup>あい しゅ</sup>なればなり、

ア ミ ン。

司祭<sup>しゅ</sup> 主よ、<sup>なんぢ</sup> 爾の<sup>ぼくひ</sup> 僕婢(某)の<sup>さいわい</sup> 福なる<sup>ねむり</sup> 寝に<sup>えいえん</sup> 永遠の<sup>あんそく</sup> 安息を<sup>あた</sup> 與え、<sup>かれら</sup> 彼等に<sup>えいえん</sup> 永遠の<sup>きおく</sup> 記憶を

<sup>な</sup> 爲し<sup>たま</sup> 給え、

え い え んの き お  
永 い 遠 んの き お  
く 、 え い え んの き  
お 憶 く 、 え い え 遠  
ん の き お 憶 憶 。

【 萬壽詞 】

か みよ 、 わ が く に の て ん の う、 お よ び  
神 我 國 天 皇 及  
く に を つ か さ ど る も の 、 わ れ ら の ふ し ゅ  
國 司 者 我 等 府 主  
き ょ う ダ ニ イ ル、 だ い し ゅ き ょ う セ ラ フ ィ ム、 お よ び  
教 大 主 教 及  
こ と ご と く の せ い き ょ う の ハ リ ス テ ィ ア ニ ン ら を 、  
悉 正 教 等  
い く と せ に も ま も り た ま え 。  
幾 歳 護 も り た ま え 。

2023年6月16日 釧路管轄司祭ステファン内田 一部改訂